

知りたいたとも思つて居ない時に。(苦悶に息をはずませながら)畜生阿魔!

クローリヤ (飛上つて) 餘りです! (非常に力を入れて) 餘りです!! 阿母さんを畜生呼はりましたね!

クランプトン 黙れ、黙らないとあとで泣きを見るぞ。おれはおまへの父だぞ。

クローリヤ あゝ、わたしはその名が忌で堪らない! あゝ、阿母さんて名が愛しい! さあ、あなた歸つた方がようござんす。

クランプトン わしは——わしは呼吸がとまりさうだ。おまへはわしを殺さうとする。だれか——わしは——(聲は息づまって、殆んど瘖撃かけてる)。

クローリヤ (冷然として) しかも頗智よく手摺の方へ行きそこから海邊の方へ

呼かける) ヴァレンタインさん。
ヴァレンタイン (下から返事する) はい。

クローリヤ 早くこゝへ来て下さい、どうぞ。クランプトンさんが呼んで居ます。(卓子へ還つて来て水をコップへつぐ)。

クランプトン (また喋舌り出す) いやわしに關つてくれるな。あの男に用はない。大丈夫だといふのに。わしはあの男にもおまへにも世話をしてもらふ必要はない。(立上つて自から氣を落つける) おまへのいふ通り、わしは還つた方がいゝ。(帽子を被り) これがおまへの訣別の語か。

クローリヤ 左様したいと思ひます。(クランプトンは執念ぶかくしばら

一五六
くグロリーヤを見て居たがやがて自分もそれに同意したやうに、凄く顔してうなづき、ホテルへ入る。グロリーヤもクランプトンが見えなくなる迄おなじ様な力味かたをして、クランプトンを見て居た。がやがてそれが寛ぐと、階段を駆け上つて来たグアレンタイムに話かけやうとして向き返る。

グアレンタイム (喘ぎ) どうしたんです。(周囲を見て) クランプトンさんは何處に居ます。

グロリーヤ 行つてしまひました。(グアレンタイムの顔は急に嬉しさと、不安と何かの魂膽とのために晴やかになる。彼は自分がグロリーヤとさし向ひてある事に気がついた。がグロリーヤは平気で話をつける) あの人は病氣らしかつたんですけれど、直つてしまひましたの。而してあなたを待たうとはしなかつたんです、御氣の毒でしたわね。
(本と日傘をとりにつく)

グアレンタイム その方が結構です。私はあの男が直きに癪に障るんです。(わざとらしく) あんな人間が、どうしてこんな綺麗な娘さんをもつたのですかね。

グロリーヤ (しばらくは呆然にとられて居たがやがて丁寧な、故意とらしい輕侮を以て彼に答へる) それが所謂美辭法といふもの、試みなんぞでせう。併し遠慮なくわたしに云はせれば、グアレンタイムさん、美辭法なんてものは、話をいやなものにするばかりです。若しわたしどもが友達になるのなら、どうぞ理性的に健全な方法で友だちになりたいものです。わしにはね、結婚しやうなどといふ望みはありません。ですから若しあなたが此條件を承知して下さるんでなければ、いつそわたしどもは此以上御互の

友誼を深くしない方が好いと思ひます。

ヴァレンティン (慎重に) なる程ではたゞ一つ伺つて置きたいと思ひます。あなたの其御異論は、主義として結婚に對する御異論ですか、それとも單に個人として、わたしとの結婚に對する御異論ですか。

グロリーヤ ヴァレンティンさん、わたしはあなたの個人の價値といふやうな問題に關して何等の説をもつほど、あなたを知つては居りません。(全然無頓着な風でヴァレンティンから振向くとして本をもつて庭椅子にかけける)。現代の結婚の條件といふものは、自尊心ある婦人が承諾し得るやうなものではないと思ひます。

ヴァレンティン (忽ちその調子を心底親切らしくかへた、まるでグロリーヤの

條件を承認し、且つその主義を聞いたので愉快で嬉しくつてたまらないといふやうに) あゝ、そこが即ちもう二人が一致して居る點なのです。

わたしは全然あなたに同意です。現代の條件ほど不公平なものはありません。(帽子を取つて元氣よく鐵の卓子の上に投げつける)。いや、わたしの望むのは、あらゆる左様いふ馬鹿げた事を除かうといふことです。(グロリーヤの側にかけたが、それが自然に行つてるので、グロリーヤも苦情を云はうとは思はない。ヴァレンティンは熱心に話しつゝける) 男と女がかういふ種類の計畫——結婚といふやうな事がなければ、お互ひに理解する事が出来ない様に思はれて居るといふことは實に恐ろしい事とお思ひになりませんか。まるでその外には利害關係がないやうに——その外には話の種がない

やうに——婦人はその以外のいゝ事は出来ないもので、あ
るやうにですね！

グロリーヤ (ひき入れられて) あゝ、あなたはやつぱり人間らしい物の
分つた話をしはじめましたね、ヴァレンタインさん。

ヴァレンタイン (うまく民にかけてやつたと思つたので目はかゞやく) 無論
ですとも！——われゝのやうな聰明な人間が二人！この愚
劣な舊慣に捉はれてる世の中に、同じ立場に居る人——偏見か
ら離れた智慮のある人と相逢ふといふのは、愉快なことぢやあ
りませんかね。

グロリーヤ (熱心に) わたしは英國でさういふ人たちに澤山逢ひた
いと思ひますわ。

ヴァレンタイン (疑はしげに) ふむ！此國には中々澤山の人間が居ま
す——かれこれ四千萬の人間が居ます。併し彼等はマデイラ
の人たち見たやうに、のこらず高等な教育を受けた肺病患者で
はありませんよ。

グロリーヤ (自分が得意の問題になつたので元氣で) あゝ、マデイラの人た
ちはみんな馬鹿で偏見をもつて居ます——所謂薄志弱行の徒
です。わたしは弱いつてのが大嫌ひ、感情づよいのが大嫌ひ。

ヴァレンタイン それがあなたの人を感動せしむる所以です。

グロリーヤ (軽く笑つて) わたしか人を感動させますつて。

ヴァレンタイン えゝ。力といふものは傳染するものです。

グロリーヤ 弱い方が傳染すると思ひますが。

ゴアレンタイン (確信を以て) あなたは強い。ね、あなたは今朝わたし
 のために此の世の中を一變してしまつたのですよ。わたしは
 拂ひの出来ない家賃の事を考へ、將來の事が恐ろしくて、鬱ぎ込
 んで居たのです。ところへあなたが入つて來たので、わたしは
 ぐわあんとなりました。(ケローリヤの額に少し雲がかかる。ゴアレンタ
 インは早口にいひつける) これは無論馬鹿々々しいことでした。
 しかしわたしに取つては全く一大事が起つたのです。あなた
 はそれを何と仰有るか知らないが、兎に角わたしの血液は——
 (全然昂奮的でない語を考へ出さうとして躊躇する)——酸化してしまひ
 ました。わたしの筋肉は緊張してしまひました。わたしの心
 ははつきりして、わたしの勇氣は増ました。それが實に不思議

ぢやありませんか、わたしはまるで感情的な人間ではないんで
 すからね。

ケローリヤ (不安げに立上り) さあ、海邊へ行きますせう。

ゴアレンタイン (陰氣に——ケローリヤを見上げて) えつ！あなたも左様

お感じになるのですか。

ケローリヤ 何を感じたと仰有るの。

ゴアレンタイン 不安を。

ケローリヤ 不安を！

ゴアレンタイン 一大事がはじまりかけてる様な不安を。あなたが
 が彼の人達の方へ駆け出さうと仰有つたらちよいと前俄かにそ
 れが崩して來たんです。

グロリーヤ (驚いて) まあ不思議です事ね——全く不思議ですこと

ね！わたしも同じ不安が起りましたの。

ヴァレンタイン これあ妙だ！(立上り)では、かけ出させようか。

グロリーヤ 駈け出す！あらいけません、それちや子供じみてますわ。(また腰をかける。ヴァレンタインは又グロリーヤの側に腰かける。而して眞面目に同情したらしい容子をしてグロリーヤを見る。グロリーヤは考へ込んで少しまごついた體で云ひ足す)あゝわたしどもの胸に起つて来る空想は、なんと科學的説明をしたものでせうね！

ヴァレンタイン さあ、何としませうかね！妙に便りない心持ちやありませんかね。

グロリーヤ (此語に反對して) 便りない？

ヴァレンタイン え、丁度自然が長い間われわれを自主自由なものとして許し、われわれが正義とか道理とか判断して居たものを行ふことを許して居た揚句に、突然その大きな手を舉げて、われわれ——自然の小さい二人の子供——の小さい襟髪をひつつかみ、いや應いはさず自分勝手な目的通り、思ひ通りに、われわれを使はうとするやうなものなのです。

グロリーヤ それはすこし空想過ぎやしませんか？

ヴァレンタイン (俄かに劇しく、まるつきり無鐵砲な調子にかはつて) 如何なもんか知ら、そんな事如何でもいゝ。(突然叱りつけるやうに) ああ、クランドンさん、クランドンさん、あなたは如何してあんな事が出来ます。

グロリーヤ わたし何をしたいといふの。

ヴァレンティン わたしに魔法をつかつてる。わたしは眞面目に

——理智的に——科學的に——何でもあなたがわたしに如斯あれかしと思ふやうにやらうとして居ましたしかし——併し——あゝ、あなたには自分で分りませんか、あなたがわたしの空想を動かさうとしてかけた魔法を。

グロリーヤ (苦笑しさうな軽蔑した様なきつい調子で) あなた、お止しなさい、そんな馬鹿げた——そんな俗悪な——戀愛なんぞ語るやうな事は。

ヴァレンティン (かゝる弱點をかくさうとして、皮肉に) せつこんでいや、いや、いや。戀愛ではない、われ——はそれより以上の事を知つてゐる。

化學と名をつけやう。あなただつて世間にかういふものゝある事は否定は出来ません、化學的作用とか、化學的合力とか、化學的混合とかいふものゝある事を。そこであなたは滅茶苦茶にわたしを引き着て居る——化學的にね。

グロリーヤ (輕蔑して) 馬鹿々々しい!

ヴァレンティン 無論馬鹿々々しいよ、此お馬鹿ちゃん。(グロリーヤ

は腹が立つやら、吃驚したやらであとずさりする)。全くお馬鹿ちゃんだ、兎に角それは科學的事實だ。あなたは見識屋だ——女の見識屋だ、それがあなたなのだ。(立上り) さあ、あなたはこれで永久にわたしと別れるんだらう。(鐵の卓子へ行き、帽子を取上る)。

グロリーヤ (寫眞をとるので科をして居る高等學校の女學校長のやうに腰を

かけて念入にじつとしながら)それで見ると、あなたはまるでわたしの眞實の性格を理解していらつしやらない。だからわたしは少しも腹が立たない。(ヴァレンタインは立止つてまた帽子を下に置く)わたしはね、いつでも友たちから自分の缺點を擧げられるのが好きなのですよ。ヴァレンタインさん。その人たちのいふことが、あなたのやうに馬鹿々々しく間違つて居てもね。わたしには澤山缺點があります——極悪い缺點が——性格にも氣質にも。でも、たつた一つわたしらしくないものがあつたとしたら、それはあなたのいふ見識屋とやらです。(きちんと唇を結んで嚴然と挑戦的にヴァレンタインを見て、いつもよりはもつと落着いて腰をかける)。

ヴァレンタイン (もつと勢ひ込んで、グロリーヤと顔を合さうといふので、庭椅

子の端の方へ戻つて来て) いや、あなたは見識屋だ。わたしの理性がさう云つて居る。わたしの智識がさう云つて居る。わたしの經驗がさう云つて居る。

グロリーヤ 失禮ですが、一寸御注意申し上げます。あなたの智識、あなたの經驗は正確なものではありません。少くともわたしは正確でない事を望みます。

ヴァレンタイン わたしは、それらのものを信じなければならぬ、あなたがわたしの目、わたしの心、わたしの本能、わたしの空想をわたしに信じさせやうとなさるんでなければ。而してそんなものはみんな、あなたについて恐ろしい嘘を私について居るんです。

ケローリヤ (折角の落着も消えかけて) 嘘ですつて!!

ヴァレンタイン (執拗に) え、嘘ですとも。(再びケローリヤの側にかける)。

わたしはあなたを世界中で一番の美人と思つてると御考へて
すか。

ケローリヤ まあ馬鹿々々しい、あなた、あんまりいひ過ぎますよ。

ヴァレンタイン 勿論馬鹿々々しい。しかし兎に角わたしの目が
さういふのです。(ケローリヤ輕蔑した反抗の容子を示す)。いや、お世
辭ぢやありません。わたしはそれを信じては居ないのですよ。

(ケローリヤはかう云はれて見ると、矢張嬉しくはないのに氣がついて恥入る)。
わたしの弱點が忌にあなたにあなたが逃げておしまひなすつたら、わ
たしはこゝへすわり込んで、子供の様に泣くだらうと思ひて

すか。

ケローリヤ (語に力をもたせるには簡單に要領を得た云ひ方をする必要があ

ると思ひ出したので) 何故そんな事をなさるの、え。

ヴァレンタイン (落つて胸の思ひに聲をふるへさせて) 無論そんな事は
しません。わたしはそんな間拔ぢやない。が、わたしの情は、わ
たしがそれをしさうだといひます——この情の馬鹿が。わた
しは情と争つて、それを理性に導きます。今の千層倍あなたを
思つたところで、無理にもしつかりと真理と相對して、それを見
詰める様に自分をします。何にしても理智的であるだけなら
容易な事ですが、併し事實は事實ですからね。こゝは何處でせ
う、天ではありません。マリーヌ・ホテルです。時はいつです。

永久ではありません。午後一時半頃です。わたしは何です、齒科醫——二圓五十錢齒科醫です！

グロリーヤ　そしてわたしは女の見識屋ね。

ヴァレンタイン　(情熱的に) いや、いや、それはもう勘忍して下さい。

わたしも幻影の一つ位はのこして置きたい——あなたに對する戀といふ幻影位は。わたしはあなたを愛つてます。(女に觸らうとする衝動が堪え切れなくなつたやうに女の方へ向く。と女は立上り憤然として身構へする。ヴァレンタインは堪らず飛上り一足ひく。) あゝ、わたしは何んて馬鹿でせう！——何て間拔でせう！あなたはちつとも理解して呉れない。海邊の石と話しをした方がいゝ位だ。(がつかりして向き返る。)

グロリーヤ　(男が退却したので安心したが、さて少々物足りない) 御氣の毒でしたわね。わたし冷淡にしようとしたのではありませんけれどもね、ヴァレンタインさん。でも、外に申上げやうが無いんですもの。

ヴァレンタイン　(グロリーヤの方へ選つて來ると、その粗暴な容子はすつかり愛嬌のある、武士的な立派な容子にかはつてしまつて) 云ひやうがないんですつて、ブランドンさん。御免なさい、わたしが悪かつたのです。いや、わたしの運がわるかつたのです。しかし如斯なるのもみんなあなたがほんとうにわたしを好いて下すつたからです。(女は何か言はうとする。ヴァレンタインは頼むやうに止める) あゝ、あなたがわたしを好いてるか、好いてないか、そんな事をいつてはい

けません併し——

グローリヤ (此女の例の主義は忽ち武装をして飛び出す) いけない! 何故
いけないんです。わたしは自由の女です。何故あなたに云つ
てはいけないんです。

ヴァレンタイン (吃驚しながら訴へる如く身を退いて) いけません。わた
しは聞くのが怖いんです。

グローリヤ (もう嘲つた風ではなく) 怖がる事はありません。あなた
は感情的の上に少し甘いんですよ。でもわたし、あなたが好き
ですわ。

ヴァレンタイン (壓つぶされた様に、鐵の椅子に身をおとして) では、もう萬事
休すだ。(失望そのもの、様になる)。

グローリヤ (分らなくなつて男に近づき) 如何したといふの。

ヴァレンタイン 好きなだけでは十分ぢやありません。今眞面目
に考へて見ると、わたしはあなたが好きなんだか嫌ひなんだか
分らなくなりました。

グローリヤ (不思議さうに男を見下して) 御氣の毒ですわね。

ヴァレンタイン (情を無理に抑へて悶ゆるやうに) あゝ、そんな事を云つ
て下さるな。あなたの聲はわたしの胸を粉碎にしまひま
す。うつちやつておいて下さい、グローリヤ。あなたはわたし
の心のどん底まで喰ひ込んで居る、わたしを苦しめ、惱まして——
わたしはもう堪へられない——あゝ——あなたには云はれな
い——

グロリーヤ (突然泣出して) あゝ、もう止して下さい、あなたの思つてる事を仰有るのは。わたし堪らなくなりました。

ヴァレンタイン (騰つて飛上る。苦悶の聲は今やしつかりした、凜々たる歡呼の響となる) あゝ、とうとうやつて来た——私の最も高潮に達した時が! (女の両手をつかむ。女は驚いて彼を眺める。二人の最も高潮に達した時が!) (グロリーヤを引寄せ、猛烈に接吻して、そして子供らしく笑ふ)。グロリーヤ、とうとう成就した。もうこれでおしまひだ、二人はお互に愛ひあつたのだ。(女はたゞ男にすがつて喘くばかり)でも、おまへさんは鬼女よろしくだつた! わたしはまつたく怖かつたんだ!

グロリーヤの聲 (海邊から呼ぶ) ヴァレンタイン!

ドリーリーの聲 ヴァレンタイン!

ヴァレンタイン 左様なら御免なさい。(手早く女の手を接吻して階段の方へかけて行く。と、そこでクランドン夫人の上つて来るのに逢ふ。グロリーヤは茫然としてしまつて、たゞ男の後姿を見送るのみだ)。

クランドン夫人 子供たちが呼んでますよ、ヴァレンタインさん。(心配さうにまはりを見て)あの人は行つてしまひましたか。

ヴァレンタイン (まごつくして)あの人! (思ひついて)あゝ、グランプトンですか。先刻行つてしまひました、クランドンの奥さん。(快活に階段を下りかけて行く)。

グロリーヤ (庭椅子に身を洗めて) 阿母さん!

クランドン夫人 (吃驚して娘の方へ急ぎ) どうしたの、えゝ。

グロリーヤ (心底から訴へる様に口惜しい様に) 何故あなたはわたしに正しい教育をして下さらなかつたの。

グランドン夫人 (驚き呆れて) まあこの子はわたし出来るだけの事をしたんだよ。

グロリーヤ あらあなたは何にも教へては下さらなかつたわ——何にも教へては。

グランドン夫人 まあ如何したといふの。

グロリーヤ (非常に激した表情で) 何もかも恥辱ですわ——恥辱ですわ

——恥辱ですわ。(耐へられないほど眞赤になつて両手で顔を掩ひ、母から振向く)。

第三幕

グランドン一家の泊つてるホテルの居間。階下の贅澤な座敷、フランス窓から庭へ出られる様になつて居る。座敷の中央には大きな卓子があつて、周囲にはいくつもの椅子がある。而して其卓子には、海老茶の帛がかけられてあつて、其上には厚ぼつた、ホテルと鐵道の案内書が展げてある。窓から入つて、此眞中の卓子のところへ来る客には、その左の方には煖爐があり、遙か向ふの戸口に近い、右手の壁には書物臺の置いてある事になるのだ。若し此人がその方に趣味のある人なら、賞めたいものが澤山ある。先づソルトンのリンクレシア壁紙の裝飾は、紫紺色と青銅色の漆で描たので、腰羽目と蛇腹とがついてる。それから座敷の隅々の鍍金のもちおくり、さては磨き込んだ黒檀臺の疵入の大理石の置柱、その上には花瓶が置いてあつて、此柱は窓の兩側に一つづつ置いてある。それから煖爐の近い方にある花瓶の直ぐ傍の飾棚であるが、之は眞中のところに模様硝子を象徴した戸をは

二二〇
め込んで角には丸い硝子板を張り、その中の棚には安物の青と白の模様の瀬戸物が入れてある。それから窓の丁度向側の疊込の竹の茶の卓子、大津の汽船の繪、ランドシーアの犬の繪。戸口と並行して、室の一方にあるのは鞍袋の様にふくらんでる大椅子。爐の敷物の上にある同じ型の居心よさうな床几が二脚。最後にぐるりと廻つて見上げると、濃緑の飾縁を取つた二枚の海老茶色の壁琥珀の窓掛を支へて居る窓の上の太い黄銅の棒などがそれだ。ひつくるめて、この部屋に居る人の御機嫌を取結び、一日十圓の部屋代も惜くないと思はせる様に巧く飾り立てた座敷である。克蘭ドン夫人は書物臺に對して校正をして居る。クロリーヤは窓の傍に立つてぼんやり外を見て居るが、腹の中はとつおいつた。爐の置時計は情ない音を出して五時を打つ。時計の鐘は自分を押込んである黒の大理石の墓の形をした外框に對して、十分の力がなくなつたのだ。

克蘭ドン夫人 五時だよ！もう彼の子たちを待つ必要はないぢや

やないか。どつかでお茶にして居るに相違ないよ。

クロリーヤ (たるさうに) ベルを鳴らませうか。

克蘭ドン夫人 鳴らして下さい。(クロリーヤは爐の方へ行き、ベルを

鳴らす) どうく校正をやつてしまつたまづ有難かつた！

クロリーヤ (茫然と室内をぶらつき廻り、母の椅子の後へ来て) 何の校正？

克蘭ドン夫人 二十世紀の婦人の新版さ。

クロリーヤ (苦笑ひして) 一章足りないわ。

克蘭ドン夫人 (校正の中を探しはじめ) さうか知ら。そんな事は

無い筈だが。

クロリーヤ まだ書いてないの、事です。わたし代りに書いて

上げませうか——何が終局まで分りましたらね。(窓の方へ還る)。

クランドン夫人　グローリヤ！また新しく謎が初まつたのかえ。

グローリヤ　いゝえ、いつもの謎なの。
クランドン夫人　(分らないので少しまごごくする。でしばらくグローリヤを見詰めて) ね、おまへ。

グローリヤ　(歸つて来て) はい。

クランドン夫人　わたしはおまへに何にも聞いた事はないのね。

グローリヤ　(母の側へ跪き) えゝ、えゝ。(突然母に手をかけ殆ど夢中になつて抱きつく)。

クランドン夫人　(やさしく笑ひながらもまごついて) ね、おまへ、大變感情づよくなつてね。

グローリヤ　(身を退いて) いえゝゝ、そんな事をいふものぢやあ

りません。あゝ！(立上り、身を引裂くやうな容子をして向うへ行く)。

クランドン夫人　(おだやかに) ね、おまへ、如何したの、えゝゝ——(給仕人茶盆をもつて入り来る)。

給仕人　(心地よく) 御用はこれでしたらう、奥さま。

クランドン夫人　さう、有難う。(書物臺から椅子をふり向け、またかける。グローリヤは、煙爐の方へ行き、顔を背向けてそこへしやがむ)。

給仕人　(ちよつと茶盆を中央の卓子において) 奥様、手前は左様思ひま

したのでございますよ。午後には茶を一杯めし上りませんと、妙に氣疲れが致しますからな。(茶の卓なもつて来て夫人の前に置き、その間も喋舌つて居る) お嬢さまと若旦那が、今しがた御歸りになりました。船へお乗りになつたのださうでございます。へえ

こんなからりとした日には、さぞお面白かつた事で——全く御面白上（中央の卓子から茶盆をとつて茶の卓子に置く）に、御身体のお薬になりますからな。
なりませんさうで、あの方は克蘭プトン様の方へ御出になりました。（椅子を二つもつて来て、茶の卓子の兩端に置く）

グロリーヤ （びくりとして、周囲を見ながら） 而して尙一人の紳士は。

給仕人 （安心なさいと云つた様に、われ知らず一寸子供の時唄ひつけた "bean roasting" の節になつて） え、入らつしやいます、入らつしやいますよ。あの方は船を漕いで入らつしやいました、が、水疱（水疱）につける薬をとり、薬屋の方へ駈けて入らつしやいました。が、直にこゝへ入らつしやいます。お嬢さま——すぐでございます。

（グロリーヤは堪へられ立上つて、戸口へ急ぐ）

克蘭ドン夫人 （中腰になつて） グロー—— （グロリーヤ出て行く。夫人

はどぎまぎして給仕人を見る。給仕人は落着いたものだ）

給仕人 （元氣よく） 何ぞ外（外）に御用で、奥様。

克蘭ドン夫人 え、もう澤山。

給仕人 有難うございます、奥様。（出て行かうといふ時、ファイルとドリー

ーが大元氣でかけ込む。給仕人は二人のために戸を開き、さて自分が出てから閉める。）

ドリー （がつくして） あ、妾にお茶を頂戴。（克蘭ドン夫人はドリーの茶を注ぐ） 船へ乗つてたの。ヴァレンタインさんも、ちぎりにこゝへ來ますよ。

フィリップ あの人にはまるで漕げやあしない。グローリヤは。

クランドン夫人 (心配さうに、フィルの茶をついで) フィル、グローリヤは

如何かしたらしいよ、何かなかつたか知ら？ (フィルとドーリーとは顔見合せて噴出しかける)。如何したの。

フィリップ (夫人の左にかけて) ロメオと――

ドーリー (夫人の右にかけて) ―― ジュリーエツト。

フィリップ (夫人から自分の茶碗を受取つて) 眞實ですよ、阿母さん。昔

むかしの物語なんです。ドーリー、牛乳をみんな注いぢやいけない。(すばやくドーリーから牛乳の壺をとつて) 全くです、春には――

ドーリー ―― 若き人の心――

フィリップ のどかにも向ふ―― 有難う (ビスケットを廻してよこした

夫人に) 戀の思ひかね。それが秋にも起るんだ――。併し今度の若き人はですね――

ドーリー ヴアレンタインさんよ。

フィリップ 而して彼の心はグローリヤに向つたんです、何を

ほど――

ドーリー ―― 姉さんにキッスをするほど――

フィリップ ―― 高臺の上で――

ドーリー (それを云ひ直して) ―― 唇の上へ、みんなの前で。

クランドン夫人 (信じられない様に) フィル！ドーリー！冗談を云つてるの。(兩人頭をふる)。グローリヤが承知して。

フィリップ あの男がグローリヤの冷笑の電に打たれて、地べた

へへたばるところを見やうと待かまへて居たんだが――

ドーリー けもないの。

フィリップ グローリヤは嬉しさうだつたのです。

ドーリー わたしたちの判断ではね。(もう一杯注がうとするファイルをと

めて) あら、一杯切りつて約束ぢやなくつて。

クランドン夫人 (ひどく心配して) おまへたちはね、ヴァレンタインさんがあらしつたら、こゝに居ちやいけないよ。そたし眞面目にこの話をしなければならぬんだから。

フィリップ あの人の考へをきかうといふんですか？それでは二十世紀主義の蹂躪も甚だしいぢやありませんか。

ドーリー 阿母さん、全くだわ、うんと責めておやんなさい。十九世

紀のつゞく中は、うんと責めてやるんですね。

フィリップ しつ、来たよ。(ヴァレンタイン入来る)。

ヴァレンタイン お茶の時間に遅くなつて済みません。クランド

ンの奥様。(夫人は茶壺を取上げる) お構ひ下さいますな。わたし

はいたいきません。ドーリーさんとファイルさんは、屹度わたしの事を御話したでせう。

フィリップ (一寸立つて) はなしたよ。ヴァレンタイン君、僕は打

明けたよ。

ドーリー (意味ありげにこれも立上つて) わたしたちはのこらず打明

けたの。

フィリップ 僕たちの義務だからね。(ごく眞面目に) 行かう。ドー

三三〇
リー。(ドリーに手を出すと、ドリーはそれを取る。兩人はあはれげにヴァレンタインを見る。そして落着いて手を組んだまゝ出て行く。ヴァレンタインはどきまぎして兩人を見送り、やがて返事を欲しさにクランドン夫人を見る)。

クランドン夫人 (立上り茶の卓子を離れて) おかけになりませんか、ヴァレンタインさん。少しお話ししたい事があるんです、おかまひにならないければ。(ヴァレンタインしづかに大椅子にかけたが、こゝ十五分ばかりは確な事がないといふ事を蟲が知らせてくれる。クランドン夫人はファイルのかけて居た椅子を取り、ヴァレンタインから工合のいゝ距離にしづかにかける)。わたしは、まづ最初にあなたのお察しを願はなければならぬ。わたしは自分のでございますがね。わたしは自分のぼつちりしか

知らない——いや何にも知らない問題について御話したいと思ふんです。戀愛の話なのですがね。

ヴァレンタイン 戀愛!

クランドン夫人 え、戀愛の話! あら、あなた、それんなに吃驚した顔をなさるには及びません、ヴァレンタインさん。わたしがあなたを愛つてゐるではありませんよ。

ヴァレンタイン (へこたれて) あ、眞實に奥様が——(立ち直して) あなたが愛つて、下すつたらどんなに自慢でせう。

クランドン夫人 有難う、ヴァレンタインさん。でもわたしそんな事をはじめには、もう婆さん過ぎますわ。

ヴァレンタイン 初める! あなたは一度既に——

クランドン夫人 一度もまだ。あんな事は世間普通の事なんて、
ヴァレンタインさん。わたしの結婚したのは、何をしてるのか
分らない程年の行かない時だったのです。あなたが御覽の通
り、その結果は夫にもわたしにも恐ろしい失望だったのです。
ですからね、わたしは結婚した女ではありませんけれど、戀をした
事は一度もないんです。一度も戀をしかけられた事はないん
です。そして正直なことを申しますとね、ヴァレンタインさん、
他の戀をして居るのを見ましてもね、わたしは自分の経験の不
完全なのを悔む氣にはなれなかつたのです。(ヴァレンタインは
一面づくつて疑はしきうに夫人を見たが何にもいはない。夫人の顔色は少し
赤くなつたが無理に氣を落着けて語を足す)。あなたはわたしのいふこ

とを信じて下さらなくつて。

ヴァレンタイン (自分の心を讀まれたのでまごついて) え、そんな事は

ありません、そんな事はありません。

クランドン夫人 ヴァレンタインさん、わたしは如斯いふ事を申し上げ
たいんです。人道の爲めに捧げた生涯は自分一身の心の迷ひ
や、小説めいた感情などを遙かに超越した熱情や熱誠を要求さ
れます。ところがあなたの熱情や熱誠は別な方なのでせう。

(ヴァレンタインは、夫人がその點に關して自分を喜んで居ないことを知つ
て、悲しきうに首を振つてさうでないといふ身振する。) 左様ぢやないで
せう。兎に角わたしはかういふ所謂情の問題を論ずるのは、ま
ことに都合がわるいんです。其癖あなたはその方の通でいら

つしやるらしいけれど。

ヴァレンティン (不安らしく) 奥さん何を仰有るんです。

クランドン夫人 御存じだらうと思ひますが。

ヴァレンティン グローリヤさんの事ですか。

クランドン夫人 さうです、グローリヤの事です。

ヴァレンティン (參つてしまつて)なるほど左様です。わたしはグローリヤさんを愛つて居ます。(夫人が話し出さうとするのを遮ぎつて) あなたの仰有らうといふ事は分つて居ます、わたしには金がありません。

クランドン夫人 わたしは金の事なんかちつとも氣にしません。ヴァレンティンさん。

ヴァレンティン ではあなたは餘程かはつて居らつしやる。わたし

しが今迄逢つたほかの阿母さんたちとは。

クランドン夫人 あゝ、やつと分りましたね。あなたはそんな事にかけては中々老練家でゐらつしやる。(ヴァレンティンは抗辯しようと口を開いたが、夫人は少し憤然として止めてしまふ。)わたしはかういふ事はまるで分りませんけれど、うちの娘のやう女を、たつた一度逢つたゞけであれ迄にしようといふ男の方は、まるで初心な方ではないでせう。わたしには其位の事が分らないほど、常識が無いと思つて居らつしやるんですか。

ヴァレンティン それでは確かに――

クランドン夫人 (相手をとめて)ヴァレンティンさん、わたしあなたを

責ては居やあしません。グローリヤの方で氣をつければいゝ
んです。あなたには御自分のすきな様になぐさむ権利がある
んです。

ヴァレンタイン (抗辯して) なぐさむ！まあ、クランドンの奥様！

クランドン夫人 (手厳しく) あなたは名譽にかけて、真面目だとおつ

しやるのですか、ヴァレンタインさん。

ヴァレンタイン (養やけて) 名譽にかけて、わたしは真面目です。(夫

人は彼の顔をしみんと見る。ヴァレンタインは例の洒落たい氣が勝つて
妙な風に語を足す) いや、わたしは何時だつて真面目です。が、しか

し——その御覽のとほりなんです！

クランドン夫人 わたしはあの、それを心配して居たんです。(嚴格

に) ヴァレンタインさん。あなたは女の愛情をもてあそぶ連中
の一人ですわね。

ヴァレンタイン さあ、若し人道といふものだけが真面目なものだ

といふのなら、左様でないとは云ひません。が、もう分りました。
(立ち上つて帽子を取り、わざと丁寧な挨拶をする) あなたはわたしがもう

伺はないことを望んで居らつしやるんでせう。

クランドン夫人 いゝえ、わたしだつてね、今のところグローリヤを

一番工合よくあなたの手からにげさせるには、もつとあなたと
御懇意にさせる方がいゝ位は知つて居りますよ。

ヴァレンタイン (ほんたうに驚いて) 奥様、そんなことを仰有るものぢ
やありません。あなたはほんたうに左様思つて居らつしやる

んですか。

クランドン夫人 わたしは飽くまで信じて居りますよ、ヴァレンタインさん、グロリーヤの心はね、子供の時からそれあ能く修養されてるんです。

ヴァレンタイン (驚きながらも落ついて) うゝむ！えゝ、それは結構です。(再び腰をかけ、亂暴に帽子をはふり出す。もう何にも恐ろしいものはないと、いふ人の容子で)。

クランドン夫人 (ヴァレンタインの落着いた容子が癪に障り) 如何いふおつもりなの？

ヴァレンタイン (自信を以て夫人の方へ向き直り) 奥様、わたしはあなたに教へて上げる事がある。

クランドン夫人 (堅くなつて) わたしは何時でも喜んで教へを受けます。

ヴァレンタイン あなたは砲術——射撃術——大砲——軍艦といふ様な問題について研究した事がありますかね。

クランドン夫人 砲術が何かグロリーヤに關係がありますか。
ヴァレンタイン 大いに有ります——その實例として。クランドンの奥様、此世紀間の砲術の進歩は常に、大砲の製造家と、砲彈を防ぐべき甲鐵板との決闘であつたのです。あなたはこれまである最良の大砲に對して、保險つきの軍艦をお作りになつたとする。と、或人はもつと好い大砲を作つて、あなたの軍艦をしづめる。するとあなたは、その大砲に對して、保險つきの、もつと大

きい軍艦をおつくりになる。と、或人がもつと大きな大砲を作つて、またあなたを沈める、といふ様な工合でついでに行く。両性間の決闘も全くこれに外ならんのです。

クランドン夫人

両性間の決闘ですつて！

デアレンダイン

左様です、両性間の決闘といふ語はおきよになつた事がございませう。あゝ、わたしは忘れて居た。あなたはマデイラに居らしたのだつた。この語はその後に出来たのだつて。なんなら御説明しませうかな。

クランドン夫人

(蔑むやうに) 要りません。

デアレンダイン

無論いりますまい。そこで両性の決闘の方ではどんな事が起つたかといふと、先舊式の阿母さんが、男の性悪に

對して、娘を保護する爲めに舊式の教育を受けたとする。其結果は御承知の通りだ。舊式の男がその娘をごまかしてしまふ。舊式の女はもつと確實に娘を防衛しやうとした——即ち舊式の男には大丈夫過るほどの鋼鐵板を見つけて出さうと決心した。そこで其女は自分の娘に進歩的教育を與へた——つまりあなたのおやりになつた計畫だ。それが舊式の男には障碍であつた。男はそれが不都合だ——婦人らしくないとか何とか、まあいろいろな事を云つた。が、それは一向男の益にたらない。で、男は舊式の攻撃手段——御承知の——女の前に兩膝をついて、愛情、名譽、服従なんて、いろんなものを誓ふといふ奴です、そんなものをすつかり抛つてしまはなければならぬ事になつた

のです。

クランドン夫人　まあ待つて下さい。誓ふなんてのは女のした事ぢやなかつたのですか。

ヴァレンティン　左様ですかね。うむ、多分あなたの仰有る通りでせう——いや、勿論左様だつたのです。そこで男は何をしましたらう。丁度砲術家の通りにしたのです——女よりも一歩進んで——自ら進歩的教育を受け、丁度前の勝負で女を打破つた様に、また其一戦で女を打破つてしまつたんです。わたしは齡ひ未だ二十三に満たずして、既に女權論を主張する婦人の鼻をあかせる術を學びました。こんな事の發見されたのは疾うの前の事です。が、兎に角わたしの遣り口は、全然新式なものです。

クランドン夫人　（如何にも思さうに）左様でせうつて。

ヴァレンティン　併しそれが新式であるといふために、これらの方法か如何しても功を奏さない一種の娘達があります。

クランドン夫人　へえ、どんな種類のです。

ヴァレンティン　全然舊式な娘です。若しあなたが此舊式でグローリヤさんを御育てになつたらわたしがけふの午後十八分間に獲得した地域まで進むに、十八ヶ月かゝつたでせう。全くです、クランドンの奥様、婦人の高等教育はグローリヤさんをわたしの手に渡しました。而して婦人の高等教育をグローリヤさんに信じさせたのは、あなたでした。

クランドン夫人　（立上りさま）ヴァレンティンさん、あなたは大變に

お利口な方ね。

ヴァレンタイン (これも立上りさま) あゝ、クランドンの奥さん。

クランドン夫人 その癖あなたは何にもわたしに教へて下さらない。

左様なら。左様なら。

ヴァレンタイン (ギョツとして) 左様なら! あゝ、わたしは尙一度あの

人に逢つてから歸るわけにはまゐりませんか。

クランドン夫人 あれはあなたが見えなくなるまでは歸つて來な

いてせう、ヴァレンタインさん。あなたに逢ひたくないつてわ

ざゝ、室を出たのですから。

ヴァレンタイン (考へ込んで) それはいゝ兆候だ。左様なら (挨拶し

て戸口の方へ行きかける。正しく満足の體で)。

クランドン夫人

(驚いて) あなたは何故それをいゝ兆候だと思ひ

なさるの。

ヴァレンタイン (戸口近いところで振り返り) わたしは死ぬ程あの人を

恐れて居るからです。而してあの人も死ぬ程わたしを恐れて

居た様です。(出て行かうとして振向くと丁度入つて來たグローリヤとび

つたり顔を合せる。グローリヤは彼をじいつと見る。ヴァレンタインは傾り

なさいうにグローリヤを見やがてクランドン夫人を見廻すそれから又グロ

リヤを見たが、もう全く茫然として居る)。

グローリヤ (眞蒼になつてやつとの事無理に落ついて) 阿母さん、ドーリ

ーの云つてる事は眞實ですか。

クランドン夫人 ドーリーは何て云つて。

グローリヤ あなたはわたしの事を、此紳士に御話なすつたんですつて。

ヴァレンタイン (眩やく) この紳士! えゝ!

クランドン夫人 (鋭く) ヴァレンタインさん、しばらく舌を動かさないでいたゞきませうか。(ヴァレンタインは憐れつぽく兩人を見やがて失望したやうに肩をゆすぶつて大椅子の前へかへり、その上へ帽子を投げつける)。

グローリヤ (如何にもとげくしく母と顔を見合わせる) 阿母さん、あなたそんな事をなさる権利をもつて居らつしやるの。

クランドン夫人 わたしは権利のない事なんぞは、云つたつもりはありませんがね、グローリヤ。

ヴァレンタイン (おせつかに夫人の話をたしかめ) ありませんとも。

なんにもそんな事は。(グローリヤはいひやうのない忌な顔をして彼を見る) これは失禮しました。(面目なげに大椅子の上にかける)。

グローリヤ わたしにしか関係のない事ですもの。誰にしたところで、そんな事を考へるだけの権利だつて、ある筈はありません。(感情の苦悶を隠さうと、兩人の處から振向く)。

クランドン夫人 まあ、若しわたしがね、おまへの誇りを傷つけたとしたら――

グローリヤ (ちよつと兩人をふり返つて) わたしの誇り! わたしの誇りですつて!! あゝ、そんなものは失つてしまひました。もう今では誇ることに出来る力さへ失つた事が分りました。(再びあち

らな振向いてても、女つてもものが自分で自分を防禦する事が出来ない位なら、誰にだつて出来るものですか。それに誰だつて、そんな事をする権利はありません——阿母さんでさへも。え、わたしはあなたの信用を失つてしまひました。丁度わたしが此人の尊敬を失つてしまつたやうに。——（泣いじやくりを抑へやうとして語を切る）。

ヴァレンタイン （呼吸をのんで）この人！（再びつぶやく）え、！

克蘭ドン夫人 （小さな聲で）まあ、しづかに、あなた。

グロリーヤ （語を繼ぐ）——でも、わたし少くとも、他の世話にならずに自分の恥辱をも忍ぶ権利をもつて居ます。どうせわたしは、自分の目ではじめて見た男の爲めに自由にされる様に生れて

来た弱い人間の一人なんですもの。そしてわたしは自分の運命に従はなければならぬんでせう。ですから、どうぞわたしを救はうなんて、わたしに恥辱を與へるやうな事は、止して下さいまし。（卓子の向ふの端の前へ腰をかける、目へハンケチをあてい）。

ヴァレンタイン （飛上り）まあ御聞きなさい——

克蘭ドン夫人 ヴァレン——

ヴァレンタイン （物ともせず）い、や、云ひます。わたしは彼是三十秒間も黙つて居ました。（グロリーヤの側へ行き）。克蘭ドンさん——

グロリーヤ （口惜しさうに）い、え克蘭ドンさんちやありません。あなたは知つて居らつしやる癖に。わたしをグロリーヤと呼

んでも大丈夫な事を。

ザアレンタイン いゝやわたしは左様はしません。そんな事をしやうものなら、あなたはあとでそれを攻撃なすつて、わたしを無禮だなんて云つて悪口をおつしやるに相違ない。わたしがあなたを尊敬しないなんてのは、情ない詐偽だ。なるほどわたしがあなたの前の誇りを尊敬しなかつたといふのは事實です、尊敬すべき所がないんですもの。あんなものはたい卑怯に過ぎません。わたしはあなたの智識も尊敬しなかつた。わたしの方がずつとすぐれて居る、何と云つても男の専門に屬するもんですからね。が、心の底のかき亂された時！あの大事な秋の来た時！あなたがわたしを大膽にして下すつた時！——あゝ、

あの時、あの時、あの時には！

グロリーヤ あの時には、あなたはわたしを尊敬なすつたのでせうね。

ザアレンタイン いゝや、しませんでした。わたしはあなたを崇拜しました。(グロリーヤはつと立上つて彼に背を向ける。)それだつてあなたは、私の一度経験した其時なるものを失なしてしまふ事は出来ません。だからもう如何な事が起らうと構やあしません。(特別に誰へといふ事なく元氣さうに饒舌くつて戻つて来る)私の云つてる事のくだらないことは、自分でも能く知つて居ます。が、しやべらずには居られません。(クランドン夫人に)わたしはグロリーヤさんを思つて居ます。その外には何にもありません。

クランドン夫人（力を込めて）ヴァレンタインさん。あなたは一番危険な方です。グローリヤ、こゝへおいで。（グローリヤは此命令をちと可笑しいと思ひながらそれにしたがつて、首打垂れたまゝ母の右手に立つとヴァレンタインは其正面に居る事になる。クランドン夫人はやがて非常な輕蔑の容子で話しはじめ。おまへが感動さして、大膽にしたといふ此方にうかつつて御覽。今まで幾人の女が此方を感動させたかつて（グローリヤは突然嫉妬の忿怒と驚きの目を以て見上げる）。おまへを捉へた罌を、是まで幾度女にかけたかつて。その口でもつてこれまで幾度女を釣り出したかつて。兩性の決闘者といふ一番似合の仕事を立派に仕おほせるまでには、これまでどの位練習をやつて見たかつて。

ヴァレンタイン それお餘りひどい。あなたはわたしの秘密を暴露なさる、クランドンの奥様。

クラントン夫人 聞いて御覽、グローリヤ。

グローリヤ（忿怒に顔を眞赤にして、拳をかためてヴァレンタインの方へ行く）眞實ですか。

ヴァレンタイン まあ、怒つちやいけません——

グローリヤ（遮二無二邪覺をして）眞實ですか、あなたはそんな事を云つた事があるんですか。あなたはそんな事を思つた事があるんですか——外の女の事なんか。

ヴァレンタイン（露骨に）ありましたよ。（グローリヤ握拳をふり上げる）。

クランドン夫人（吃驚して娘の側へ飛んで行き、その振上げた手を抑へて）グロ

ーリヤ!! まあおまへ! 取上せてるぢやないか。(グロリーヤは太息をつくとその打つてかいらうとする態度がしづかにくじけてしまふ)。

ヴァレンティン ようござんすか、愛と嘆美との男の力は、矢張他の力と同じ事で、其眞價を知る迄には、幾度かそれを投げて見なければならぬのですよ。

クランドン夫人 また十八番だよ、グロリーヤ。氣をおつけ。

ヴァレンティン (とめる様に) まあ!

グロリーヤ (取済して輕蔑したやうに、クランドン夫人に) わたしに忠告をなさる必要があると思つて居らつしやるの。(ヴァレンティンに) あなたはわたしに愛はれやうと思つて、骨を御折なすつたのね。

ヴァレンティン 骨を折ましたよ。

グロリーヤ その癖、あなたはわたしにひどく——憎まれる様にう

まく仕事をなすつたのね——

ヴァレンティン (哲學者然と驚きますね、愛憎二つの差はそんなにわづかなものでせうか。(グロリーヤ腹立しげにヴァレンティンに後を向ける。ヴァレンティンはクランドン夫人に話しつゝける)。わたしは女房に愛はれてる男を幾人か知つてますが、その連中はみんなそつくり其通りです。

クランドン夫人 失禮ですが、ヴァレンティンさん、もうお歸りになつた方がよろしくはございませんか。

グロリーヤ 阿母さん、わたしの爲めならこの方を追出す必要はありませんよ。わたしには、もう此人なんか何でもありません。

此人はドーリーやファイルのお相手にいゝでせう。(輕蔑してゐるやうな平氣な容子で窓に近い卓子の端の前へ腰をかける。)

ヴァレンタイン(元氣に) 勿論です。さういふ見方をするのは利口な

遣り口です、よしませう、クランドンの奥様、あなただつて私見た様なおつちよちよいと喧嘩をして居てもつまりますまい!

クランドン夫人ヴァンタインさん。わたしは飽までもあなたを信用しせん。ですけれど、あなたのその御氣の毒な浮調子を、たゞの破廉耻だとか厄雜者だとか思ふにはしのびません。――

クローリヤ(大きな聲で獨言の様に) 破廉耻だわ、厄雜者だわ。

クランドン夫人 ―― ですから、ファイルやドーリーをこゝへ呼んで何氣ない様にもうこれで御別れといふ事にして上げやうぢやあ

りませんか。

ヴァレンタイン (夫人が自分に對して最高の厚意を盡して、もくれた様に) ど

うも一言もありません、クランドン夫人。ありがたうございませう。(給仕人入來る。)

給仕人 奥様、マツコーマス様がおいでになりました。

クランドン夫人 あゝ左様かい、おつれ申して來ておくれ。

給仕人 あの應接間でお目にかゝりたいと仰有いますが、奥様。

クランドン夫人 何故こゝぢやいけないの。

給仕人 へえ、それを手前が申上げても構へませんければ申上げますが、マツコーマスさまは、お若い方々の居らつしやらない處で、あなたさまに申上げます方が、その工合がよろしいと思召

していらつしやるんでございませう、へえ。

クランドン夫人 さう申上げておくれ、若いものはこゝには居りませんで。

給仕人 あの方々は戸口のつひ向ふに居らつしやいます、何かおありになるんでございませう、大變にきよろくなさいましてな。

クランドン夫人 (出かけやうとして) ぢや、わたし行きませう。

給仕人 (夫人の爲めに戸を開いて) 恐れ入ります、へえ。(夫人は出て行く。給仕人は室へ還つて来て、ヴァレンティンと目を見合はす、ヴァレンティンはあつちへ行けと目でしらせる。) へえ、畏まりました。一寸お茶の道具をへえ。(盆を取つて) 御免下さいまし、へえ、有難うございまし

た、へえ。(出て行く。)

ヴァレンティン (ゲローリヤに) そこでだ。あなたは遅かれ早かれ、屹度わたしを許して下さるに相違ない。だからいつそ今の中に許して下さい。

ゲローリヤ (自分のいふ事を十分向ふに通すやうに立上つて) 如何してもいやです！草が萌え、水が流れる中は、如何しても、どうしても、どうしても!!!

ヴァレンティン (悪戯れもせず) ぢやあ、それでもよろしい。わたしは何事につけても不愉快とは思へない。もう二度と再び不愉快にはならない。どうしても、如何しても、如何しても、草が萌え、水が流れる中は、あなたを思へば、わたしは嬉しくつて、年が年中

夢中になるに違ひない。(嘲弄の語が逸早くゲローリヤの唇を洩れんとすると彼は素早く口を入れる) いや、これは今まで饒舌つた事のないのです。新しい事なのです。

ゲローリヤ 次の女へ云ふ時にはもう新しくないでせう。

ヴァレンタイン まあ、そんな事を云ふもんぢやありません。グロ

ーリヤ、そんな事を云ふもんぢや有りません。(ゲローリヤの足下に跪く)。

ゲローリヤ 起きて下さい。起きて下さい！如何してそんなことをなさるの。(ファイルとドーリーとは例の如く第一着を争つて室内へ飛び込む。と此始末を見て止る。ヴァレンタイン飛びおきる)。

ファイリツプ (分別らしく) 失禮しました。行かう、ドーリー。(行かうと

して振向く)。

ゲローリヤ (弱り込んで) 阿母さんは直きに歸つて来るでせう、ファイ

ル(嚴格に) 阿母さんの来るまで、こゝに待つて下さい。(窓の方へ振向き、そとへ行つて一同に背中を見せたまゝ、外を見ながら立つて居る)。

ファイリツプ (意味ありげに) あゝ、成程、ふゝむ！

ドーリー はゝあ！

フリーツプ 君は大分上機嫌だね、ヴァレンタイン君。

ヴァレンタイン 左様ですよ。(二人の間に來て) まあ、聞いて下さい。

あなたがた二人は事情を知つてる筈だ。(ゲローリヤすばやく振向く、また新らしく無法な事を云はれるのかと思つて)。

ドーリー 残らず。

ザアレンタイン　そこで萬事休すさ。私は嫌はれた、侮辱された。
 わたしはこゝへたゞお情で置いてもらつてゐるのだ。分つたか
 ね、萬事休すだ。あなたがたの姉さんは、眞面目にわたしの口説
 を聞いてはくれなかつた。いや如何してもわたしに興味を感
 ずることが出来ないほどお高くとまつてゐた。(クローリヤは満
 足の體で輕蔑らしく窓の方へ向き返へる) すつかり分つたかね。

ドーリー　いゝ氣味だわ。あんまり性急だからだわ。

フイリツプ　(ザアレンタインの肩を拍いて) まあ心配したまふな。若
 し姉が君と結婚しやうものなら、君は自分の心も自分のものと
 は云へなくなるどころだつたのだ。君はこれから君の生涯の
 第一回を新しくはじめの事が出来るよ。

第十七回位の處でせう。

ザアレンタイン　(此洒落のために氣を悪くさせられて) いやそんな事を

云ふものぢやありません。そんなあと先見ずな事をいふと、隨
 分間違ひが出来ますよ。

ドーリー　へえ、成程。ふーむ。

フイリツプ　はゝあ！ (燈爐の方へ行つて自分が如何にもこゝの大將だとい

ふやうな容子ですつくと立つ)。

マツコーマスは馬鹿に眞面目な顔をして急いでクランドン夫人と入つて
 来る。夫人はたゞもうクローリヤが心配なので、クローリヤがどこに居る
 か知らとぐるりと見廻して、その側へ行かうと窓の方へ行く、その時クロー
 リヤも信任と愛情な面に現はして、夫人の側へと戻つて来る。最後に夫人
 は自分が先に坐つて居た床几へかける。クローリヤはその後に立つて居

二五四
る。マツコーマスは大椅子の方へ行かうとして、ドーリーに挨拶される。

ドーリー 大變に元氣ね、フィンチさん。

マツコーマス (いやに眞面目で) あなたの阿父さんから極大切な御便
があります、お嬢さん、極々大切な。(大椅子の方へ行つてかける。ド
リーはすっかり感じたやうな顔をして、マツコーマスのあとから、その右手へか
ける)。

ヴァレンタイン わたしは御暇した方がよさうだ。

マツコーマス いや、さうぢやない。ヴァレンタインさん。あなた
も深い關係があるんだ。(ヴァレンタインは卓子の前から椅子を取つて
来て、大椅子の近くへ置き馬乗に跨つて、その背にもたれかゝる) 奥様、あな
たの良人は、まだ丁年に達しない末の方の二人のお子たちの監

督權を要求して居らつしやる。(クランドン夫人はつと驚いて、ドー
リーが無事て居るかといわれ知らず見る)。

ドーリー (感激して) あゝ、あの方はなんて親切なんでせう。わたし

どもが好きなのね、阿母さん。

マツコーマス 御氣の毒ですが、そんな事を考へて居らしやるのは、
あなたの間違ひです、ドロテアあん。

ドーリー (浮れて甘へた調子で) ドロテーエーエーア! (フィンチの肩に
止つて、すつかりげんなりして) あゝ、フィンチさん!

マツコーマス (腹立しげに向ふへ動き出して) いけない、いけない、いな
い、いけない!

クランドン夫人 (止める様に) ドーリーさんや! (マツコーマスに) 離婚

の行爲はわたしに子供たちの監督權を與へたのですよ。

マツコーマス 併しそれにまた如何なる形式でもあなたがあの人に接近したり干渉したりしてはならんといふ契約が含まれて居ます。

クランドン夫人 でもわたしそんな事をしましたか。

マツコーマス 末のお子さん方の行爲が法律から干渉を受ける程の事になるか如何かは、上級辯護士の意見を聞く必要のありさうな問題ですが、兎にも角にもクランプトンさんは、たゞに干渉されたばかりではない、ある計略にかゝつてこゝへつれ込まれたものだと思つて居ます。而してその計略にはヴァレンタインさんが、あなたの手先になつて働いたものだと思つて居るのです。

です。

ヴァレンタイン 何だつて、え。

マツコーマス 彼人はあなたがあの人に毒をかけたと主張して居

ます、ヴァレンタインさん。

ヴァレンタイン 其の通りです。(一同驚く)

マツコーマス 何の爲めにそんな事をしたです。

ドーリー 特別料金二圓五十錢のために、

マツコーマス (癪癪を起してドーリーに) わたし眞實にあなたにお願

ひします、お嬢さん。下らない言を云つて、かういふ眞面目な話

の邪魔をしないやうに願ひたい。(此一喝は濟まないと云つたやうな

沈黙を引起したので、マツコーマスは却つて赤面する。彼は咳を一つして話を

新らしく初め、今度はケローリヤに話しかける。お嬢さん、わたしは自分の責任として、あなたにお話したいと思ひます。あなたの阿父さんも矢張、ヴァレンタインさんがあなたと結婚したいと思つてゐる事を知つて居らつしやる——

ヴァレンタイン (素ばやく口を入れて) え、わたしは思つて居ます。

マツコーマス (心地を悪くして) 左様なると、此お嬢さんの阿父さんは君を女たらしだと思ふかも知れないが、それにしても君は驚くわけには行かないね。

ヴァレンタイン わたしは女たらしです。あなたやつてわたしの贏けたもので、わたしの家内が喰つていけると思つては居らつしやるまい、一週間に四十銭では！

マツコーマス (腹を立て、) わたしはもう、何にもいふ事は無い。わたしは歸つて克蘭プトンさんに云はう、此一家は父なるもの

の居られる場所では無いつて。(戸口へ行かうとする)。

グランドン夫人 (しづかに權威をもつて) フィンチさん！ (マツコーマ

ストとまる) ヴァレンタインさんが眞面目になれなくなつて、あなたはなれるでせう。まあおかけなさい。(マツコーマスは自分の

品格を保たうか友誼を保たうかとちよつと迷つたが今度はドーリーとグラ

ンドン夫人との丁度真中ほどのところへ腰をかけて、へこたれてしまふ)。あなたも御存じでせう、こんな事はみんなわざと拵へた事件なんです。ファガスはあなた以上にはそれを信じては居ません。

さあ、どうぞわたしにあなたの眞實の忠告——あなたの親切な

打釋けた忠告をして下さい。必ず子供たちはしづかにさせます。

二六〇

マッコーマス (あきらめて) 成程成程！わたしの云ひたいと思ふのは、如斯いふことなんです。あなたが前に良人と御一緒の時は、あなたはあの人をひどく不利益な目に逢はせなすつた。

クランドン夫人 如何したと仰有るの、え。

マッコーマス 左様、あなたは進歩的婦人で、平氣で輿論を蔑し、社會があなたについて何をいほうと眼中に置かなかつた。

クランドン夫人 (それを誇として) え、その通りです。(ケローリヤは椅子の後から身を屈めて母の髪に接吻する、ひどく思ひ亂れたといふ表情で)。

マッコーマス 奥様、その反對にあなたの良人は、どんな事でも新

聞に出るのを非常に恐れて居つた。それにはあの人の職業上の察してやらなければならぬ事があつたし、同時に舊式な家庭の家風といふものもあつたのですからな。

クランドン夫人 あの人自身の偏見は申すまでもなくね。

マッコーマス 如何にもあの人のやりかたは好くなかつた、奥様！

クランドン夫人 (冷笑して) いかにもね。

マッコーマス しかしあの人一人が悪かつたのでせうか。

クランドン夫人 ではわたしが悪かつたのでせうか。

マッコーマス (あわてし) いや、無論左様ではない。

ケローリヤ (じいつとマッコーマスを見て) そんな事はないでせう、マッ

コーマスさん。

二六一

マツコーマス あ、お嬢さん、あなたは、中々手ひどくお苛めなさる。が、まあ、わたしに之れだけ云はして下さい。ある男が不似合な結婚をした時にです。それはだれが悪いといふわけではありません、たゞ矛盾した趣味が偶然に一緒になつたといふだけなんです。——其男がその不幸のために、家庭の同情を奪はれた時にです。ね、そしてわたしの考へては、男といふものはその家庭の同情なるもの、ために、結婚するのだらうと思ひますが。まあ、一口にいふと、その細君なるものが無い方がましなくらい悪かつた時にです。ね、(其細君だつて無論自分に悪いところがあつた時にです。ね、さういふ場合にです。ね、その男が細君を責めるために、まづ事がいよいよ、面倒になり、それから自棄になつてしまつて、折々亂暴なことをするほど酒を飲み、他所から同情を求めるほどになつたからと云つて、何も怪しむに足らないぢやありませんか。

クランドン夫人 わたしはあの人を責めはしなかつたのです。わたしは唯自分と子供たちとをあの人の手から救つたのです。

マツコーマス 左様です。が、あなたはひどい契約をなすつた。奥様。あなたはあの人を自分の自由にした。あなたは離婚の訴訟を法廷に提起して、其事件を公表すると脅迫して、あの人に兩膝をつかせた。若しあの人がある力をあなたの上に揮ふ事が出来て、あなたからお子さんがたを奪ひ取り、あなたの名さへも知らない様に育て上げたとしたら、あなたはどうかお感じにな

る。あなたは如何なさる。ところであなたはあの人の感情について少しは道理だと思ひなさらんか——普通の人情から云つて。

クランドン夫人　あの人の感情なんてものを見た事はありません。わたしの見たのはあの人の疝癩とそれから彼の人の——(身を戦はせて) いろんなくだらない普通の人情ばかりです。

マツコーマス　(忿然として) 女といふものは随分冷酷なものですね、奥様。

ザアレンティン　全くだ。

クローリヤ　(むつとして) お黙んなさい。(ザアレンティンへこむ)。
マツコーマス　(あらゆる勇氣を盛返して) まあ、一つわたしの最後のは

なしを聴いて下さい。クランドンの奥さん。世間には情合のふかい、親切な情合さへも有つてる人で、それを口に出してはいへない人があります。あなたがクランプトンさんに不足に思つてるのは、何でもない文明の外面です。親切らしい、心地のいゝ手段で、役にもたゝない御世話ぶりを見せたり、腹から出さないお世辭を云つたりするに過ぎないんです。まあ倫敦に住んで御覧なさい、あすこの全體の組織といふものは、詐偽の懇親たゞ一つでもつてるので、あなたは二十年の間あなたを毒の様に憎んでる男をちつとも知らずに居様といふ處なのです。あなたもあそこに住んで居たら、直に目が醒めたに相違ないんです。倫敦ではわれわれは親切な手段で不親切な事をします。

甘い言で苦い事を云ひます。友人を微塵に引裂かうとする時には、いつてもその人にクロールフォルムをかけます。が、まあ、それと別な方面を考へて見て下さい！不親切な手段で親切な事をする、人の事を考へて下さい——手障りのわるい、聲の耳障りな、疔癩持で心にもない事をやる、人に折れて出やうとするその仕草が却つて自分の愛してる人を氣まづくさせたり、心地をわるくさせたりするが、その癖矢張われ／＼同様に人は愛してもらひたがつて居る。かういふ人の事を考へて下さい。如何にも克蘭プトンさんは忌な氣象をもつてゐる。あの人は禮儀もなく、懸引もなく、愛嬌もない。あの人は誰からも愛情を得る事の出来る人間では無い、あの人のいふまゝにそのいふ事を聞

いてやる人でも無かつた日には。それにしてもあの人は自分の肉からも血からも何一つ可哀さうだとさへ——思はれる事は出来ないのですか。

ドーリー (すつかりおとなしくなつて) 何て美しい事をいふんでせう、フインチさん。あなたは本當に親切ですわね。

フイリツプ (成程と思つて) フインチさん。實に雄辯だ——全く雄辯だ。

ドーリー ねえ、阿母さん、もう一度あの方を呼んで上げて下さいな。一緒に晚餐を喰べませう。

克蘭ドン夫人 (平氣で) いけません、ドーリー。わたしは晝餐だつて碌々たべはしなかつたのです。ねえ、フインチさん、ファガス

二六八
の事をわたしに話して下すつたところで、何の役にも立ちません。あなたはその人と結婚して見た事はないんですけれど、わたしには覚えがあるんですから。

マツコーマス(グロリーヤに) お嬢さん、わたしはこれまであなたに御話する事を控へて居た。それといふのは、クランプトンさんのわたしに云つた事が眞實なら、あなたは阿母さんよりももつと冷淡だつたといふ事だから。

グロリーヤ (物ともせず) あなたは阿母さんが強いものだから、今度は弱いわたしに訴へやうといふのですね。

マツコーマス あなたの弱いところにはありません、お嬢さん。阿母さんの智に訴へたから、今度はあなたの心情に訴へるので

す。

グロリーヤ わたしは自分の心情のあてにならないことが分つて来ました。(憤つたやうに) グアレンマインを一瞥して、わたしは出来るものなら自分の心情を引裂いて、投げつけたいと思ひます。あなたに對するわたしのお答へは、母の答へと同じことです。(クランドン夫人の方へ行き、母に手をかけて立つ。が、夫人はこんな表情には立ちきれないので、大急ぎに手を離させる。無論、グロリーヤの感情を害さないやうに)。
マツコーマス (敗北して) では、如何も残念ですが——残念ですが。わたしも出来るだけの力は盡しました。(如何にも不満足さうに立上つて行かうとする)。

クランドン夫人 でも、フィンチさん、あなたは如何なさりたかつた

の。わたしどもに如何させやうと仰有るのです。

二七〇

マツコーマス あなたとクランプトンさんの取るべき第一歩は、クランプトンさんが離婚の行爲に對して責を負ふべきか否かに就いて、上級の辯護士の意見を求める事です。そこで何故あなたは、直ちにその意見を求め、打とけた會見をして（夫人の顔はむつかしくなる）——中立的會見といひませうかね——紛紜を方つけやうとしないのです——こゝで——このホテルで——今夜。如何ですな。

クランプトン夫人 併しその辯護士の意見は何處から求められます。マツコーマス それは雲の上から落ちて來ました。わたしはクランプトンさんのところから、こちらへの歸り道に非常にえらい王

室辯護士に逢つたのです。此人が世間に名を成した事件を、わたし其下で取扱つた事がありました。此人は土曜日から日曜へかけて、海の空気を吸ひながら、この土地に住んでる親戚を尋ねるために、こゝへ來たのださうです。それでわたし皆様をうまく會合させる様にしたら、其人もやつて來て、意見をかしてくれてもいゝと、親切に云つてくれるんです。だからわれわれは此機會をにがさないで、穩かに打解けて家事の整理を計らなければなりません。わたしは友人をこゝへつれて來ることにして、それからまたクランプトンさんをもこゝへ來るやうに説得したいと思つてゐるのです。如何です、賛成して下さいませんか。

二七一

クランドン夫人 (しばらく考へた後、稍不気味さうに)

しは辯護士の意見なんか必要と思ひません。わたしは自分自身の見解にしたがはうと思ふからです。それからわたしはフアガスにも逢ひたくはありません、わたしはあの人を好きませんし、それに會見をしたところで、碌な事があらうとは思ひませんから。しかし(立上り) あなたは子供たちを説き付けておしまひなすつたから、彼の人だつてまるで望みのないことはないでせう。兎に角あなたのいゝやうに爲すつて御覽なさい。

マツコーマス

(夫人の手を取り握手して)

有難う、クランドンの奥様では九時としては如何です。

クランドン夫人

結構です。ファイル、どうぞベルを鳴らしておくれ。

(ファイルはベルをおす) かしわたしはヴァレンタインさんと共謀の罪を着せられ様といふのなら、ヴァレンタインさんには御同席を願つた方がいゝと思ひますが。

ヴァレンタイン

(立上りながら)

左様ですとも、それが必要な事と思ひます。

マツコーマス それあ何も異論はあるまい。わたしは圓滿に解決すべき大希望をもつて居ます。ちや、左様なら。また後刻。(出て行く時給仕人に逢ふ。給仕人はマツコーマスの爲めに戸を開いて居る。)

クランドン夫人

ウキリアム、九時にお客さまが二三人あるから、七時半の晚餐を七時にしてもらひたいものだがね。

給仕人

(戸口にて)

七時でございますか、へえ。かしこまりました

た、へえ。今晚は忙がしうございますから、手前共にもその方が
勝手にございますよ、奥様。今晚は樂隊やら、飾り燈籠やら、いろ
んなものがございましてので、へえ。

ドーリー 飾り燈籠！

フィリップ 樂隊！ウキリアム、どういふわけなんだえ。

給仕人 假裝舞踏會で、

ドーリーとフィリップ (同時に給仕人の方へ突進して) 假裝舞踏會！

給仕人 へえ、左様でございますよ。短艇競漕會の幹事がたの發
起で、水難救助船慈善會なのでございます、へえ。(クランドン夫人に)
折々手前共で致しますので、へえ。庭へは支那提灯をつけまし
てな、へえ。それはもう華やかで面白くつて、陽氣で、罪がなくつ

て、全くでございますよ。(フィルムに) 切符は階下の帳場にござい
ます、へえ。一枚二圓五十錢。御婦人は、殿がたと御一緒ならば
額でございます。

フィリップ (給仕人を引ずつて行かうとして其手をつかむ) さあ、帳場へ行
かう、ウキリアム。

ドーリー (呼吸もつかずに給仕人の一方の手を取つて) 早く、みんな賣切れ
ない中に。(兩人は中へ給仕人を入れて戸の外へ引張つて行く)

クランドン夫人 まあ、あのふたりは如何しやうといふんだらう。(行
きかけて) あとから行つて止めてやらなければならぬ——(二人
についてしやべりながら見えなくなる。クローリーは冷然としてヴァレンヌ
インを熱視する。やがてわざと懐中時計を見る)。

二七六
ヴァレンティン 分りました。大變長く御邪魔しました。もう行きませう。

グローリヤ (輕蔑しながらも木帳面な調子で) わたしはあなたに御詫をしなければなりませんわねヴァレンティンさん。わたしも自分で左様思つて居りますの、わたしの申上げやうは少し烈しかったやうです——いえ少し亂暴だつたやうです——あなたにはね。

ヴァレンティン 如何致しまして。

グローリヤ でもわたしは先の人がそれほどの品格もないのに、その人をあがめたり尊敬したりする事は出来ない性分なんですからね。

ヴァレンティン (平凡に) 併し男が迷ひ込んでる時には、如何したつて品格のある様なぞには見える筈はないぢやありませんか。

グローリヤ (極めて自然に) そんな事をわたしにいふもんぢやありません。止して下さい。それは侮辱ですわ。

ヴァレンティン いや、これはほんの愚にもつかないことなのです。が、わたしはそれを云はずには居られません。

グローリヤ あなたは眞實に戀をして居らつしやるのなら、そんな馬鹿な事は出来ないでせう。戀はあなたに品格を與へます——眞面目にします——美といふものさへ與へます。

ヴァレンティン あなたは眞實に戀がわたしを美しくすると、お考へになりますか。(グローリヤは冷然たる輕蔑の容子をもつてヴァレンタ

インに背を向ける。そうら御覽なさい、あなたの方が眞面目ぢやない。戀だつて誰にでも新しい天分を與へるわけには行きません。たい其人の持つて産れた天分を高めることが出来るだけです。

グロリーヤ (再びグアレンタインの方をずっと見廻して) あなたはどんな

天分をもつて産れたのです、え。

グアレンタイン 輕はずみな心を。

グロリーヤ それに輕はずみな頭腦、輕はずみな信仰、それから男と

いふものを作るあらゆるものがみんな輕はずみてね。

グアレンタイン 其通り。全世界は今や、光の中に舞ふ羽の様なも

のです。而してグロリーヤさんは太陽です。(グロリーヤ憤然とし

て頭を擡げる) 御免なさいお暇致します。また九時に、左様なら。

(元氣に立去る、あとにグロリーヤたった一人其後姿を見成りながら、室の眞中に立つて居る)。

第四幕

同じ室。九時。一人も居ない。燈火は點いて居るが窓帷はしめてない。窓は明いたまいで支那提灯が幾列か、外の木間に燈つて居る。かすかに星のかがやく空。楽隊は庭内で舞踏の音楽を奏して居て、海の音もそれに漏れてしまふ。

給仕人はクランプトンとマツコーマスとを案内して入つて来る。クランプトンはおどくして心配さうだ。彼はだるさうに怖さうに大椅子にかける。

給仕人 御婦人がたは假裝會を御覽になりながら庭を散歩にお出かけになりましたへえ。もし旦那方がおかけなすつておいで下さいますれば手前が皆さんに申上げてまゐりませう。

(窓をぬけて庭へ行くとする。その時マツコーマスが呼止める。)

マツコーマス 一寸お待ち。も一人いらつしやる方があるがその

方がいらつしつたら、直ぐお通し申してくれ。御待ちまをして居るんだから。

給仕人 よろしうございますへえ。して、お名前は。

マツコーマス ブーン。ブーンさんといふんだ。クランドンの奥様には初対面の方だがね、屹度名刺を御出しになるよ。其名前にはBOHUN.とつゞつてある。忘れちゃいけないよ。

給仕人 (にっこりして) え、大丈夫でございますへえ。手前の名もブーンでございますへえ。こゝではバーミー、ウオルタアといふので、一番よく通つて居りますがへえ。併し手前にはエーチ、ユーで綴つてよろしい権利があるんでございます。が、そんな事は致さない方がよからうと思ひましてな。この名にはノル

マン人の血がまじつてるのでございませう、へえ。が、ノルマン人の血なんぞは、ウエータアには嬉しかあございませんからな。マツコーマス 成程成程、『至誠の心は王冠よりも尊く、至醇なる信仰はノルマンの血よりも尊し』かな。

給仕人 それはその人の身分によりきりでございますよ、へえ。もしあなたが給仕人で居らつしやいましたら、その至醇な信仰とやらも、ノルマンの血も一緒に失つておしまひでございませう。で、ございますから、手前は自分でもロタブル〇ズと綴りましてな、たいもう矢鱈に氣を利かせる方がよろしいと思つて居りますので。いやこれは御邪魔を致しましたな、御免下さいまし。これと申すもあなたが餘り愛想がよくつて居らつしやるから

でございますよ、へえ。ちよいと御婦人がたへお出になつた事を申上げてまゐりませう。(窓から庭へ出て行く)

マツコーマス クランプトンさん。大丈夫ですかねえ。

クランプトン 大丈夫大丈夫。静かにしますよ。我慢をしますよ。

出来るだけの事は屹度しますよ。

マツコーマス そこでね、私はあなたばかりを悪者にはしなかつた、みんな向うの連中が悪いんだと、みんなに云つてやりましたよ。クランプトン 併し君はみんなわしが悪いんだとわしには云つたぢやないか。

マツコーマス あなたには正直なことを云つたのです。

クランプトン (悲しきうに) あれ等がわしに相當な事をして呉れたな

ら！

マツコーマス クランプトンさん、あの人たちはあなたに相當な事はしないかも知れない、まだあの年配ではそんな事を云つても無理だからね。あなたがそんな無理な條件を出さうといふんなら、われは直に家へ歸つてもいい。

クランプトン 併しわたしには確かに権利がある――

マツコーマス (やり切れなくなつて) あなたは権利を玉なしにしてしまふよ。そこでクランプトンさん、一つ最後にうかいふが、あなたが謹んで居やうと約束したのは、たゞぐづぐづいふべき種のない時だけ云はないといふ譯だつたのですか。もし左様いふ譯なら――(出て行かうとするやうに動き出す)。

クランプトン (横れつほく) まあ、わしをうつちやつて置いて下さらんか。私もううんと苛められた。うんとひどい目に逢はされた。え、屹度出来るだけの事をしませう。が、あの娘があんな風にわしに話しかけて、あんな風に見るなら――(急に語を止めて、両手で頭をおさへる)。

マツコーマス (可哀さうになつて) さう、さう、あなたがた々辛抱して勘辨さへすれば、萬事うまく行くのだ。さあ、落着いて、誰か来るやうだ。(クランプトンは餘り氣落ちがして居るので、やつと態度をかへた。グロリーヤは庭から入つて来る。マツコーマスは窓の前へグロリーヤに逢ひに行く。そのために彼はクランプトンに聞えない様に、グロリーヤに話しをする事が出来る) あすここに居ます、お嬢さん。親切にしてやつて下さ

い。わたしは暫時失禮しますから。(庭へ出て行く。グローリヤは冷然として室の真中へ静かに入つて来る。)

クランプトン (はつとして四圍を見廻して) マツコーマスさんは何處へ行つたね。

グローリヤ (うつかりと併し冷淡ではなく) 出て行きました——わたしたちを差向ひにしやうと思つて。あの人は遠慮を下すつたんでせう。(クランプトンの側へとまり、妙な容子で彼を見下す)。如何して、阿父さん。

クランプトン (淋しい中にも妙に滑稽な氣が出て) 如何したね、娘。(兩人は悲しいやうな可笑しい様な心地になつて、しばらく顔を見合わせる)。

グローリヤ 握手しませう。(兩人握手する)。

クランプトン (娘の手を握つて) ねえ、娘。わしは今日少しひ過ぎたやうだつたな、おまへの阿母さんのことを。

グローリヤ あら云ひ譯なんかしなくつてもようござんすわ。わたしあんまり高尚ぶつて、威張つてましたわね。でもわたしあれから意氣地がなくなつてしまひましたわ。え、わたしまけてしまひましたの。(彼の椅子の側の床の上にする)。

クランプトン どんな事が起つたのだええ、娘。

グローリヤ 何あに、氣にしなくつてもいゝんです。あの時はわたし阿母さんの娘の役まはりをつとめて居たんですけれど、わたし眞實はさうぢやないんです。わたしは阿父さんの娘なの。(滑稽らしく父を見て) 意氣地がなくなつたでせう。

クランプトン (佛然として) なにツ！ (グローリヤの妙な顔は依然として居る。クランプトンは降参して) 成程左様だなあ、うむ。左様らしい、左様らしい。(グローリヤは同情したやうに首肯) わしはどうも時々氣むづかしくなつていけないが、いつだつて正しい事や理窟の分らないことはない。自分でその通りにして居ない時でも。ね、おまへ、信じてくれるか、え。

グローリヤ 信じますわ！ どうせ、わたしが左様なんですもの——わたしはそつくり其通りなんです。わたしは彼女が分つてるだけは正しいことも、品格のあることも、強いことも、高尚な事も、分つてるんですけれど、あゝ、わたしの爲る事は！ わたしの爲る事は！ 外の人に爲せる事は！

クランプトン (われにもあらず少し癪にさはつて) 彼女が知つてるだけ、は？ おまへ阿母の事をいふのか。

グローリヤ (素ばやく) え、阿母さんの事です。(膝をついたまゝ、父の方へ向きその両手を抑へる) まあ、聞いて下さい。ね、阿母さんに反對しはいけません。阿母さんを悪く云つたり、思つたりしてはいけません。阿母さんはわたしたちよりずっと勝れて居ます——天ほど高くわたしたちより——あなたよりも、わたしよりも。左様でせう。

クランプトン 左様だ。何でもおまへの思ふ通りだ。

グローリヤ (満足が出来ず、父の手をななし、自分を後退らせて) あなたは阿母さんが忌なの。

クランプトン 娘やおまへは彼女と結婚して見た事はないが、わたしは覚えがあるんだからな。(ケローリヤはしづかに立上り、だんく冷然となつてクランプトンを見る)。あの女はわたしをひどい目に逢はした、まるでわしを何とも思つて居ない癖に結婚をしやあがつて。が、それから後はわしの方が悪かつたのかも知れない。(再び手をケローリヤに出す)。

ケローリヤ (しつかりと取つて諫めるやうに) まあ聞いて下さい、それがわたしに取つて危険な問題なのです。わたしの感情——憐れな、卑怯な女らしい感情——はあなたの味方なんですけれど、妾の理性は阿母さんの味方なんです。

クランプトン あ、娘、わたしも其區別には大満足だ。ありがたう。

(ヴァレンティン入つて来る。ケローリヤは忽ちわざとらしく傲然と構へる)。

ヴァレンティン 御免なさい。取次でもらふ人間が見えなかつたものですからね、見えないなんて事のないウキリアムさへ、舞踏を見に行つてゐるらしいんです。わたしも行つて見たかつたのです。が、わたしには切符を買ふ二圓五十銭さへ無かつたんです。如何しました、クランプトンさん。少しはようござんすか、え。

クランプトン どうやら自分らしくなつた。が、ヴァレンティンさん、君のお蔭ぢやあないよ。

ヴァレンティン 此恩知らずの、あなたの父さんを見て下さい、クランプトンさん！わたしはこの人のひどい痛みを救つてやつたの

にわたしの悪口を云つてますよ!

クローリヤ (冷淡に) お氣の毒ですね、母が居たらお待遇をするんでせうけれど、ヴァレンティンさん。でもまだ九時にはなりません。まい。それにマツコーマスさんのお話の紳士、辯護士の方はまだお見えになりませんかね。

ヴァレンティン え、あの人は見えていますよ。わたしは逢つて話をしました。(陽気ではあるが一物あるらしく) 屹度あなたの氣に入るでせう、あの人は全く智の權化です。心の活動してる音が聞える位なものです。

クローリヤ (皮肉を氣にもとめず) その方は何處にゐらつしやるの。
ヴァレンティン 附鼻を買つて、假裝舞踏會へ行きました。

クランプトン (いら／＼して懷中時計を見る) ちやあ、みんな假裝舞踏會へ行つたと見える、こゝで逢ふ約束を守りもしないで。

ヴァレンティン いや、あの人はもう直ぐにこゝへ來ますよ。それあ半時間前の事です。わたしはその人から二圓五十錢かりて、一緒に行くのは忌だつたから、彌次馬の中へ入つて、柵の外から見て居ました。クランドン嬢がこの窓からホテルへ入つてしまふまで。

クローリヤ あなた、そんな事までなすつたの、わたしをつけ廻して、大勢の中でわたしをじろ／＼見るなんて。

ヴァレンティン 左様です、一體誰かわたしを鎖でつないで置けばよかつたんです。

グロリーヤはヴァレンタインに背を向けて燵の方へ行く。彼は此不
しらひに至つて哲學者然と受け流して室の反對の側へ行く。給仕人は窓
の處へあらはれて、クランドン夫人とマツコーマスを案内する。

クランドン夫人 (急いではいつて来て) お氣の毒さまでしたね。大變
御待たせ申しました。

不調和なほど堂々たる見慣れぬ男が窓の處へあらはれる。ドミノと目玉
つきの附鼻とを着けて。

給仕人 (見慣れぬ男に) 御免下さいませ、こちら様はお貸切のお座
敷でへえ。失禮ではございますが、アメリカ酒場とお夜食の御
座敷へ御案内致しませうへえ。どうぞ此方へ。

給仕人は見慣れぬ男があとからついて来るつもりで案内しながら庭へ出
る。が大男は眞直に室へ入つて卓子の横へ行き、萬事承知といふ様な落着
きかたをして附鼻をとり、それからドミノを取り、ドミノで鼻を捲いて拳闘

の選手が手袋をぬぐと云つた容子で、そのつゝみを卓上へ投げつける。打
見たる處、太つた丈の高い男で、年は四十と五十の間、髪は綺麗に剃つて居る
が其勉強づかれの顔は、五分刻にして油を塗つた硬い黒い髪の毛と、ザキク
トリア朝初期の馬の毛の入つた家具見た様な眉毛のために、尙更白く見え
る。肉體的に云つても、精神的に云つても、無骨な男で、其智力と論理的な事
にかけては假借する所なく鋭どい。この男が入つて来た時の態度は如何
にも凛々しく且つ人を恐れしむる様であつたが、一たび饒舌り出すに及ん
では、その強く嚇かす様な聲、一々ひと徹へる様な分명한饒舌りかた、堅固
に頑強らしい容子。さては如何にも批評的態度で人の話を聴いてるおそ
ろしい精力といふ様なものが、他をして彼に對する、異の感を一層深から
しめる。

見慣れぬ男 我輩の名はブーンといひます。(一) あなたがク
ランドン夫人ですか。(クランドン夫人挨拶する、ブーンも挨拶する)。ク

二九六
ランドン嬢ですか。(ケローリヤ挨拶する。ブーンも挨拶する)。クラ
ン君ですか。

クランプトン (一生懸命に怒って自分の本名を主張する) わしの名はクラ
ンプトンだ。

ブーン なる程。(たゞこれだけにして今度はヴァレンタインに振向き) あ
なたがクランドン君ですか。

ヴァレンタイン (意地になってブーンを何とも思はぬ容子をして) そんな
風に見えすかな。わたしはヴァレンタインと申します。わた
しは毒をかけた男です。

ブーン あゝ左様でしたか。ではクランドン君はまだお出でに
ならんのですな。

給仕人 (心配さうに窓から入って来て) 御免下さい。奥さまあなたな
にが如何になりましたか、御存じでゐらつしやいますか——(ブー
ンを見て怒ち度を失ふ。ブーンは給仕人が落着くまでしやに構へて待つて居
る。給仕人は氣の毒なほど、へどもどしながらやつとの事とわれに返り、ブーン
に挨拶した。聲は小さいが話の辻褄はあつて居る)。御免下さい、へえ、どう
もあなた——あなたでございましたか。

ブーン (わるびれもせず) 我輩でした。

給仕人 (どきまぎして) へえ、へえ。(涙をおさへかれて) 附鼻してから
に、え、ウォルター、(卓子の前の椅子へへとくになつてかける)。どう
も相済みません、奥さま。少し眩暈が致しまして——
ブーン (威風凛然と) クランドン夫人。此人間を許して下さるで

せうか。これが我輩の父だといふことを申し上げたら。

給仕人

(斷腸の思ひで)

これ、これ、ウォルター。附鼻をしてるさへあるに、給仕人を父だなど云つたら、世間さまは何と仰有るだらう。

クランドン夫人

(如何にも親切な容子で給仕人のかけてる椅子のところへ行

きまあ左様でございましたか、ブーンさん。あなたの阿父さんは、わたくしどもがこちらへ参つて以来、大變に仲よしになつてるのでございますよ。(ブーン莊重に挨拶する)。

給仕人

(首をふつて)

これはしたり、奥様。あなたは全く御親切であらつしやる——如何にも御婦人らしい實に御愛相がよろしい。が、それでは手前の身分不相應で、却つて迷惑致します。手

前が此紳士の父だからと申して、氣にして下すつては困ります、奥さま。これはつまるところ間違ひで生れたのでございますへえ。(よろ／＼と立上る)。どうもとんだ失禮を致しました。御用の御邪魔を致しまして。(テーブルに沿うて椅子から椅子に傳はり月口へ目をつけて出やうとする)。

ブーン

一寸。

(給仕人は止るぐんにやりして)。

我輩の父は今日の事

件を目撃して居つたのではありませんか、クランドン夫人。

クランドン夫人

え、大抵見て居りましたらう。

ブーン

それなればわれ／＼には父が必要でせう。

給仕人

(訴へるやうに)

そんなことは必要でない方がいゝのでございませぬ。手前には今晚は忙しい晩なので、へえ、あの舞踏

會がございますから。全く以ていそがしい晩なので、へえ。

ブーン (頑強に) いやあなたは必要です。

クランドン夫人 (丁寧におかけなさいよ、ね。

給仕人 (熱心に) え、どうぞ、奥さま、手前は全く御一緒にかけてます

わけにはまわりませんので。手前がかやうな事を致しては相成りませんので。如何も有難うございますが、どうぞお構ひな

く。(情けなさ、うに一同の顔を一つ、に見廻す。石の心も和らぐ様な表情をして)。

グロリーヤ 無益に時を費してはいけません。ウキリアムはたゞわたしたちの用を足したいといふんでせう。わたし珈琲を一杯欲しいがね。

給仕人 (見る／＼景氣づいて) お嬢さま、珈琲でございますか。(うれし

さうに微笑に眩く) へえ、承知いたしました。ありがたう、お嬢さま。

まことに好い折に仰有つて下さいました、まことにお考へぶか

い、まことに如何も思ひやりの御ありになる。(クランドン夫人に

向ひ、こはくながらも豫期するところある様に) 何ぞ、あなたさまにも、奥様。

クランドン夫人 え、——さうね、大分あついから葡萄酒を一つこ

しらへてもらひたい様に思ふがね。

給仕人 (にこやかに) 葡萄酒でございますか、へえ！承知致しまし

た、へえ。

グロリーヤ あ、ほんたうに、わたしも珈琲を止してそれにしませ

う。中へ胡瓜を少し入れてね。

給仕人 (はしやいで) 胡瓜でございますか、へえ！承知致しました、へえ。(アーンに) あなたには何ぞ特別にしませうか、へえ。胡瓜が御嫌ひでしたね。

アーン クランドン夫人がおかまひなくば——サイフオンに——スコツチ、ウキスキーを。

給仕人 よろしうございます、へえ。(クランプトンに) あなたにはアイリツシユ、ウキスキーでございますましたな。(クランプトンはぶつくと云ひながら、承知する。給仕人は尋ねるやうにヴァレンティンを見る)。

ヴァレンティン わたしは胡瓜が結構。

給仕人 よろしうございます、へえ。(勘定をして) 葡萄酒にサイフ

オンに、スコツチが一つ、アイリツシユが一つでございますね。

クランドン夫人 それでい、だらうと思ふがね。

給仕人 (また獨言のやうに) よろしうございます、へえ。只今直ぐに、

へえ。難有うございます。(窓から元氣よく出て行く、たつた二分、そこらの間に人生の幸福のあらゆる事を一から十までのこらず測つて見ても)

マツコーマス さあ、初めてもよからうと思ひますが。

アーン クランドン夫人の良人が来られるまで、待つ方がい、でせう。

クランプトン 君は何を云つてるのだ、わしがあれの亭主だ。

アーン (忽ち此語と前の語との矛盾をつかまへて) あなたはつい今しがた、クランプトンといふ名だと云はれたばかりぢやありません

か。

克蘭プトン それお云ひました。

克蘭ドン夫人

四人 わたしは――

グローリヤ

同時 わたしの――

マツコーマス

に饒 クランドン夫――

ヴァレンタイン

舌る あなたは――

ブーン

(雷鳴の如き語たゞ二つを以て彼等の語を濁れさせてしまふ) お待

ちなさい。(死せるが如き沈黙)どうぞ我輩にしやべらせて下さい。

さあ皆さんおかけなさい。(一同意氣地なくしたがおふ。グローリヤは

燈籠の上の床几にかける。ヴァレンタインはグローリヤのかけてる側面を廻

つて窓に向いてる大椅子にかける。これで彼はグローリヤに向ひ合ふことが

出来るのだ。克蘭プトンはヴァレンタインの方へ脊を向けて大椅子にかけ

る。克蘭ドン夫人は出来るだけ克蘭プトンを避けやうとして室の反対の

側にくつついて戸口に近くかける。マツコーマスはその左手の側にかける。

ブーンは一同の真中克蘭ドン夫人の脇にある卓子の一隅に近いところへ傲

然と座を占める。一同席が定まると彼は克蘭プトンを熟視しさてはじめる)

此家族の中では夫の姓が克蘭プトンで、細君の姓がクランド

ンといふらしいのですな。此の如くわれは此事件の門口

へはいるか入らないに、早くも難問に出くわす事になりました。

ヴァレンタイン (立上り大椅子に片膝をつけてブーンにしやべりかける) 併

しそれは極めて單純な――

ブーン (雷霆の一聲ヴァレンタインを微塵に挫く) さうです。クランド

ン夫人は外の姓を襲いだのです。といふ事が、我輩には分らんだらうと、あなたは危ぶまれたが、それは分り切つた事です。ヴァレンタイン君、あなたはわたしの智力を信用されんと見える——（ヴァレンタインが抗議しやうとするのを推止めて）いや、あなたに答へていたいく必要はない。たゞ、此次に我輩の言論を妨げやうといふ氣になつた時に考へていたゞけばよろしいのです。

ヴァレンタイン（があんとまゐつて）これあまるで龍車を以て螳螂を打殺して居るやうなものだ。が、姓が違つて居たところでそれが如何したといふのです。（再び腰をかける）。

ブーン 如何したといふのか御話しよう。いや如何したところぢやない。若し此家庭の紛紜を、我輩等の希望の通り圓滑に解

決せしめんとするならば、克蘭ドン夫人は、社會の便宜と禮儀の爲めに、夫の姓をなされるべきである。（克蘭ドン夫人は決然頑強なる表情を見せかける）然らざれば克蘭プトン君が自ら克蘭ドン君となのらんければならん。（克蘭プトンは誰がなんと云つてもそんな事をするものかといふ容子を見せる）ヴァレンタイン君、あなたはたしかに簡単な事だと思つて居られるだらう。（彼は鋭どく克蘭ドン夫人を見やがて克蘭プトンを見る）が、我輩はあなたに反對する。（烈しく顔に皺をよせて椅子に身を投げかける）。

マツコーマス（怯々して）ブーンさん、如何でせう、兎に角重要な問題を片づけてしまつた方がよくはありますまいか。

ブーン マツコーマス君、その重要な問題については何も難か

しい事はないんです。決してない。が、港口で難船するのは、つ
まらん事の爲めですよ。(マツコーマスは謎に出つくわしたやうな容子
なして居る)。あなたは我輩に同意を表しませんかな、え。

マツコーマス (胡麻を摺って) 若しわたしが同意をしましたら――

ブーン (遮りためて) 若しあなたが同意をされたら、あなたは我
輩になつてしまつて、あなたなるものではなくなつてしまふ。

マツコーマス (いやに機嫌を取つて) ブーンさん、無論あなたの専門は――
ブーン (又おし止めて) 我輩の専門は、他人が非である時に、自分が

理である事です。若しあなたが我輩に同意すれば、我輩はこゝ
に居る必要がなくなつてしまふ。(論點を十分に徹底させるため、マツ
コーマスに首肯いて見せる。それから突然はげしくクランプトンにふり向い

て) ところで、クランプトン君、あなたは此事件中、どの點を一番氣
にして居られるですか。

クランプトン (そろくはじめ) 此事件に關しては、だれでも自分と
いふ考へを打棄つてもらひたいのです――

ブーン (推しめて) それはみんなやつて居る、クランプトン君。(ク
ランドン夫人に) あなたも自分を棄てやうと思つて居られるでせ
う。クランドン夫人。

クランドン夫人 左様ですとも、わたしだつて好んでこの席へ出た
のではございません。

ブーン あなたも左様でせう、クランドン嬢。
クロリーヤ え。

アーン 左様だらうと思ひました、われはみんな左様です。
 ダアレンレイン わたしは別です。わたしの目的は利己的
 アーン それはあなたが利己的でない様に見せるよりは、有り
 まゝらしく見せる方が、クランプトン嬢に對して、一層好結果があ
 るだらうと考へたからです。(ダアレンレインは此道理な語のために、
 二進も三進もいかななくなつて情なきうな黙り笑ひてごまかす。アーンはも
 うすつかりあらゆる敵を取ひしめて了つたのに満足して椅子に自分の身體を
 投げ戻し、我慢をして一同の云ひ分を聞いてやらうとすると云つた様な風をす
 る。さあ、クランプトン君云つて見給へ。自分を棄てるといふ事
 はまあ分つた。いつでもさうもつて來るのは普通の人情です。
 クランプトン 併しわたしは全くそのつもりなんです。

アーン なる程。そこであなたの要點を伺がはう。

クランプトン 誰でも理窟の分る人は、わしのいふことは自分勝手
 ではないと云つてくれます。その事といふのは子供について
 なんです。

アーン なる程。子供について如何といふのです!

クランプトン (思ひ入つて) 子供はその――

アーン (又先を折つて) お待ちなさい。あなたは自分の感情につ
 いて御話なさらうといふのでせう、クランプトン君。それはい
 かん。我輩はその感情には同情するが、それは我輩の關知する
 處ではない。あなたの如斯と思ふ處をはつきりと云つて御覽
 なさい。それがわれらの知りたと思ふ處なんです。

クランプトン (不安げに)そこがなか〜むづかしい問題なのです。
ブーンさん。

ブーン まあ御聞かせなさい、手傳つて上げやう。あなたは子供
さんがたの現在の境遇について如何いふ故障が御ありになる
のです。

クランプトン 子供たちの育てかたに故障があります。(クランドン
夫人の眉は氣味のわるい様に聳む)。

ブーン それならばそれを變へるには何如しやうといふのです。
クランプトン 彼子たちはもつと目立たない衣服を着なければい
けないと思ひます。

クランプトン 馬鹿々々しい。

ブーン (忽ち自分の身體を椅子へ投げかへし此邪覺に對して憤慨する) あ

なたは今もへこんだ癖に、ヴァレンタイン君——すつかりへこ
んだ癖に。

ヴァレンタイン クランドンのお嬢さんの着物は何が悪いんです。

クランプトン (眞赤になつてヴァレンタインに) そんな事は君に云はれ
なくたつて分つて居るよ。

グロリーヤ (諷めるやうに) 阿父さん!

クランプトン (悲しきやうにへこんで) これ、わしはおまへの事を云つて
るんぢやない。(ブーンに對し訴へるやうに熱心に) が、若い方の二人
の奴等の事です!ブーンさん、あなたはまだ御覽にならなかつ
た。が、御覽になつたら屹度御同意なさる。あいつ等の衣服の

容子と云つたら何だか馬鹿に目立つて何だか妙に派手な輕薄なところがある。

クランドン夫人 (堪へかれて) あなたはあの子たちの衣服はわたしの好みだと思つて居らつしやるの。ほんたうに子供らしい事ね。

クランプトン (嘩りたつて立上る) 子供らしい! (クランドン夫人も憤然として立上る)。

マッコーマス 一同立

クランプトンさん君は約束したんぢやない馬鹿げて居る、あの人たちの扮装は實にい。

グアレンタイン 上り一
緒にし
グロリーリア ヤべる
どうぞ理性的に願ひます。

大混亂。此時突然次の室からコップのふれ合ふ音が警鐘の様に聞える。一同は悪いことでもした様にふり向くとそれは給仕人が庭の酒場から今しも還つて来たところであつて盆をもつてしづかに卓子の方へ来たが盆はちやらんく鳴つて居る。死せるが如き沈黙。

給仕人 (卓上にコップを一つ別に置いてクランプトンに) あなたにはアイリツシユ、へえ。(クランプトン少してれてかける。給仕人はも一つのコップとサイフォンとを前に置いてブーンにいふ)。スコツチとサイフォン、へえ。(ブーンは自烈たさうに首を揮る。給仕人は大きな硝子の壺を真中に置く)。それから葡萄酒。(一同しづかに其席に着く。平和は場に満る)。
クランドン夫人 (謙遜にブーンに對し) 濟みませんでした。御邪魔を致しまして。ブーンさん。
ブーン (静かに) 全くです。(出ていかうとする給仕人に) 一寸まつて

下さい。

給仕人　へえ、へえ。畏りました、へえ。(テーンの椅子の後へつゝ立つ)。

クランドン夫人　(給仕人に)　悪く思つておくれでない。無理に引止めるやうだけれど、ブーンさんのお好みなんだからね。

給仕人　(もうすつかり落着いて)　え、え、如何致しまして奥様。この人の修業のつんだし、つかりした心の活動を見て居るのは、手前にも氣乗のする事でございますよ——全く痛快な、全く面白い實際爲めになることでございますから、奥様。

ブーン　(また前のつゞきの指揮をはじめ)　そこでクランプトン君。われはあなたへの返事を待構へて居るのです。あなたは衣服に對する異論を取下げますか。それともそれを主張しますか。

か。

クランプトン　(訴へる様に)　ブーンさん、まあ一寸わしの地位も考へて下さい。わしは自分一人の事ばかり考へて居るのではありません。わしの妹のソフロニヤも居ます、その良人やいろいろ一族も居ますから。その連中はそのなを、大變怖がつて居るんです、少しだけでも——少しだけでも——まあ、その——

ブーン　さあはつきりと願ひます。目立つといふんですか？ けばくしいといふんですか？ 派手だといふんですか？

クランプトン　無論何もわるい意味でいふんではありません。併し——併し——(自棄になつて早口に)　あの子供たち二人を見たら、みんな心地を悪くしてしまふに違ひない。あの二人はとても

自家の親類とは肌が合はない。これがわしの苦情の種なんです。

クランドン夫人 (憤怒を抑へて) ヴァレンタインさん。あなたはフイルやドリーに何か目立つものやけばくしいものがあるとお思ひですか。

ヴァレンタイン そんな事はありませんとも全く馬鹿くしい話ですか。

クランプトン うむなるほど、勿論君は左様いふだらう。

クランドン夫人 ウキリアム、おまへは英吉利の上流社會の人を澤

山見て居るが、うちの子供たちは洒落過るかね。

給仕人 (元氣づける様に) え、如何いたしまして、奥様。(説きつける様

に) え、如何致しまして、そんな事はございません。成程少し派手で通なところもございしますが。何しろ極御好みがよろしくつて、上等で——極上品で、高尚でございします。僧正さまの御子息令嬢とも申上げたい位で、へえ、全くでございしますよ。まあ御覽にさへなれば分ります、へえ—— (此時庭内の樂隊の奏樂は丁度ワルツの最終に達したが、一人の道化役者と踊り子とは其節につれて踊りながらこの室に飛込んで来る。道化役者の衣服は一才四方の菱形の青玉絹と金とが入れ違ひになつてゐる物で、その棒は金箔をおいたので假面は上向にしてある。踊り子の裳は秋の田面の象徴で金色の密柑と罌粟の紅色から成立つて居る罌粟の色の雄蓋にあたる處は天鵝絨の上着になつて居る。二人はさながら綺麗なまばゆい妖怪である様に、マッコーマスとアーンの間を通りやがてまた輪を畫いて、卓子の横手へもどると、ワルツの最後の拍子になる。と二人は一同の真中で畫面の見えになる。道化役者は左の膝をつき、踊り子は道化役者の右の膝

の上に立ち、自分の頭の上に両手を輪にする。舞踊はいづれも美事にしなやか
だつたが、画面の見えがた、不手際で、龍頭蛇尾にはりかけた。

踊り子 (叫び出して) 誰か下して頂戴、わたし轉げおちさうだ。阿

父さん下して頂戴よ。

クランプトン (心配げに駈けて行つてその手を取る) 娘や!

ドーリー (父に助けられて飛び下り) 有難う、あなたは親切ね。(ファイルは

棒を帯へさして卓子の側にかげ、葡萄酒をつぐ。クランプトンはへどもどとして

大椅子の方へ戻る)。まあ、あゝ面白かつた! あらまあ! (ドーリーは喘

ぎく卓子の前側へ一飛びにかける)。あゝ、葡萄酒なの! (ぐつと呑む)。

ブーン (力のある調子で) これが若い方の令嬢ですな。

ドーリー (ブーンの恐ろしい聲と容子とに驚いて、卓子から滑り落ちる) えゝ左

様ですよ、あなたどなた?

クランドン夫人 ドーリー、此方はブーンさんと仰有つてね、今晚わ

たしたちの御世話をしに来て下さつた御親切なお方なつたよ。

ドーリー あゝ、では此方は天の使の様にブーンと飛んでいらしつ

たの――

フィリップ しつ!

クランプトン ブーンさん――マッコーマスさん、わしはあなた方

に御願致すのですか、一體まあこれでいゝものでせうか。これ

に苦情を云つたからと云つて、あなた方はわしの妹の一家を責

める事が出来ませんか。

ドーリー (氣味のわるい様に眞赤になつて) あなた、また初めたの。

クランプトン (ドーリーに) なあになあに。おまへの年頃では無理もないのだらう。

ドーリー (拗く) わたしの年なんか氣にしくたつていゝわ。綺麗でせう。

クランプトン うむ、綺麗だ。 (負けたしるしに服をかける)。

ドーリー (尙しつこく) あなたこれが好き?

クランプトン 娘や、わしがそんなものを好いたり、賞めたりするだらうと、おまへはどうして思ふんだね。

ドーリー (何處までも追窮しやうと決心して) あなたはこれを綺麗だと思つてる癖に嫌ひだなんて、どうしてそんな事が思へるの。

マッコーマス (憤然として癪にさはつたらしく立上る) いや、わしは云は

なけりやならん。 (グリーンはひどく感服してドーリーの話を聞いて居たか、忽ちマッコーマスを叱りつける)。

グリーン いや、邪魔をしてはいかん、マッコーマス君。此令嬢のやり口は立派なものだ。 (非常に力を入れてドーリーに) 飽までお聞きなさい、グランドン嬢。あくまで御聞きなさい。

ドーリー (グリーンに向つて) まあ、あなたにやほんたうに嚇かされてしまふわ。あなたいつもそんな風なの。

グリーン (立上り) 左様です。が、我輩にまごつかせる様な事なんぞするものではありません。お嬢さん。あなたはまだそんな事をする年齢ぢやない。 (マッコーマスの椅子を、グランドン夫人の側から取つて自分の側へおき) おかけなさい。 (ドーリーはすつかり氣に入

つてしまひ、従がふ。と、ブーンもまたかける。マツコーマスは自分の席を取ら
 れて、卓子と大椅子との間に在る向う側の椅子を取る。さあ、クランプブトン
 君事實はあなたの面前へ出て来ました二人とも。あなたは此
 二人の若い子供さんたちと一緒に住まはうと望んで居ると、自
 分では思つて居られる。ところが、あなたはそれを望んで居な
 い。——(クランプブトンは抵抗をしようとするが、ブーンはまるで受つけない)
 いや、あなたは望んで居ない、あなたは望んで居ると思つて居る。
 が、我輩の方があなたよりは能く分つて居る。あなたは此令嬢
 に對して、夕には芝居の踊り子の如き扮装をさせ、朝には交際社
 會の踊り子の如き扮装をさせたいに相違ない。ところが此令
 嬢はそれを望まん——決して望まん。が、令嬢は自分では望む

と思つて居る、併しながら——

ドリー (口を入れて) いゝえ、わたしは思ひません。(斷然)わたしは
 如何な事があらうと、綺麗な衣服はすてない。如何な事があら
 うと。グローリヤがマデイラであの男の人に云つた通り、どう
 しても、どうしても！どうしても！草が生え、水が流れる中は。
 ヴアレンタイン (非常に混濁して立上る) 何ですつて！何ですつて！
 (非常に早口に喋り出す) グローリヤは何時そんな事をいひまし
 た。誰れにそんな事を云ひました。

ブーン (大きな姿に似合はず、憐れむ様な調子で止めながら自身の身體をな
 げ返す) ヴアレンタイン君——

ヴアレンタイン (苛立つ) 邪魔をしてはいけません、一大事があるん

だ。グランドンさんがそれを誰に云つたか是非聞かなければならない。

ドーリー ファイルは覚えてるでせう。ファイルだれにだつたらうね。
第三號か知ら、それとも第五號か知ら。

ヴァレンタイン 第五號だツ!!!

フィリップ しつかりしたまへヴァレンタイン君。あれあ第五號ぢやなかつた。なあに平素へばりついてばかり居たつまらない海軍士官さ——極辛抱づよい毒にならない人間さ。

グロリーヤ (冷然と) わたし共はなんの話をして居ると思つて居らしつて、え。

ヴァレンタイン (眞赤になつて) 失敬しました。御邪魔をして済みま

せんでした。もう御邪魔はしません、グランドンの奥様。(クヨン

ドン夫人に挨拶し、涕返るやうな怒りを無理に抑へて、庭へ出て行かうとする)。

ドーリー ふゝむ!

フィリップ はゝあ!

グロリーヤ どうぞおあとを、ブーンさん。

ドーリー (ブーンが恐ろしく眉に皺をよせて話の緒をどう新らしく捻き出したものかと考へてる中に口を入れる) ブーンさん、あなたはこれからわたしたちを虐めにかゝらうとして居らつしやるのね。

ブーン 我輩は——

ドーリー (邪冤をして) えゝ、左様ですとも、あなたはしなないと思つて、併しして居る。あなたの眉つきでわかるわ。

ブーン (降参してしまつて) クランドン夫人。利口なお子さんがた
 ですな——頭のはつきりして居る、能く育つたお子さん方だ。
 我輩は十分に考へてかういふのです。その御禮として我輩に
 教へて下さるわけにはいきませんか。この人たちが舌を動か
 さなくなる方法を。

クランドン夫人 ドーリーさんてば——!

フライリップ おたがひの持病だ、ドーリー。黙れつ!(ドーリー口を緘
 ぶ)。

クランドン夫人 さあ、ブーンさん、この人たちが又初めない中に——

給仕人 (内緒で) 早く、さあ、早く。

ドーリー (にこやかに給仕人に) ウキリアムや!

フライリップ しつ!

ブーン (おもひもかけず、眞先にドーリーへ一問を投ずる) あなたは結婚
 をしやうといふ考へがありますか。

ドーリー わたし! さうね、フィンチさんはわたしを洗禮名で呼ん
 でますわ。

マッコーマス そんな事はない。ブーンさん、わたしが此お嬢さん
 の洗禮名をつかつてるのは、この人の阿母さんの舊友であるた
 めばかりなんです。

ドーリー さうね、阿母さんの舊友でわたしをドーリーといふのは
 いゝでせうけれど、併しドロテエーエエアつてのは如何いふ
 わけ。(マッコーマス憤然として立上る)。

クランプトン (心配げに、マツコーマスを抑へやうとして立上る) 怒つちや

いけない、マツコーマスさん。喧嘩は止さう。我慢をして下さい。

マツコーマス わたしはもう我慢がならん。クランプトンさん。

あなたは最も憐れな意志の弱點を示してゐるね。實に恐ろしい事だ。

ドリーリー プーンさん、わたしたちの代りにフィンチさんをいぢめてやつて下さい。

プーン いぢめてやりませう。マツコーマス君、君は自から笑ひを招いて居る、おかけなさい。

マツコーマス わたしは――

プーン (儼然と手をふつてマツコーマスを叱りつけやうとする) いや、お

かけなさい、おかけなさい。(マツコーマス不承不性にかける。と、クランプトンは大きに落着いて、その例に倣ふ)。

ドリーリー (プーンに、おとなしく) 有難うよ。

プーン 諸君さあ、我輩のいふ事をお聞きなさい。マツコーマス君。君は此令嬢が今云つた方面に向つて、どの位思ひ込んでるか思ひ込んでないか、これについては我輩は何等の意見をも述べやうとは思はん。(マツコーマスは抗議しやうとする)。いや、我輩の邪魔をしてはいかん。若し此令嬢が君と結婚しなければ、誰か他の人と結婚するだらう。此令嬢が父の姓を冒さんといふ面倒は、これで解決する事が出来る。も一人の令嬢も結婚しやう

として居られる。

グロリーヤ (顔を蔽めて) ブーンさん。

ブーン え、あなたは爲やうとして居られる。あなたはそれを御存じがない。が、爲やうとして居られる。

グロリーヤ (立上り) ま、お待ちなさい。わたしはあなたに御注意します、ブーンさん、わたしの意向に就てはお答へなさん様に願ひます。

ブーン (立上り) そんな事は仰有るにや及ばん、克蘭ドン嬢。あなたは我輩を囀ります事は出来ん。あなたの姓は、程なく克蘭ドンでもなければ、克蘭プトンでもない事になるに相違ない。そして我輩は自分でいふとさへ思へば、其姓の何であるかを

申上げる事が出来る。(卓子の他の端へ行き、そこでドミノを展げ、卓上に附鼻を置く。彼が動いた時、一同立上る。而してファイルは窓の方へ行く。ブーンは身振で給仕人を呼び、身仕度の手傳をさせる。) クランプトンさん、訴訟を起さうといふあなたの考へは全然下らん。あなたが黒白を決する事の出来ない中にお子さんがたは丁年になつてしまふ。(給仕人に肩の上へドミノをつけさせて) あなたは打釋けた解決をするより外にしやうが無いのだ。若しあなたが、あなたの家族に求むる處、彼等があなたに求むる以上であるならば、あなたは面白からん解決をしなければならん。彼等があなたに求むる處、あなたが彼等に求むる以上であるならば、あなたは結構な解決をする事が出来る。(ドミノをふるつて壁をキチンとし、鼻をとり上

る。ドーリーは感心してじつと見つめる。彼等の地位を強固にする力は、彼等が個人として極めて愉快な人間となるに在る、あなたの地位を強固にする力は、あなたの収入に在る。(附鼻をつける、再び變な姿にかはつてしまふ)。

ドーリー (アーンの方へかけて行き) あらまあ、あなた今度はまるで人間見た様に見えてよ。わたし一寸あなたと一踊りしてはいけなくつて。あなた踊れて。(ファイルは又道化役者になつて、さながら彼等の上に魔法をかけてる様に、棒をふるふ)。

アーン (雷の如き聲で) 踊れます。あなたは我輩が踊れないと思つて居る。が、我輩は踊れます。さあ、お出なさい。(ドーリーをつかまへ、如何にも強さうな容子ではあるが念を入れた手振足振で踊りながら窓か

ら出て行く。給仕人はその間にいつもの場所へ椅子を置還すので忙がしい)。

フィリップ 『踊り／＼で、限りなく歡を盡さん』か、ウキリアム。

給仕人 へえ、へえ。

フィリップ おまへ、ドミノと附鼻を二組み揃へる事は出来まいかね、お阿父さんとマツコーマスさんの分を。

マツコーマス そんな事は如何してもいかん。わしは御免を蒙る。克蘭プトン まあ、何も大して悪いことはないぢやないか、たつた一度位やつたつて、マツコーマスさん。ねえ、仲間はづれにはなるまいぢやないか。

マツコーマス クランプトンさん。君はわたしの考へて居つた様な人間ではない。(鏡とく) 暴漢はいつでも卑怯者だ。(善しげに窓

・の方へ行く。

クランプトン (あとからついて) まあ、氣にしちやいかん。ちつとは
彼子等ものんきにしてやらないとね。なにか着るものをこし
らへて呉れるかね、給仕人。

給仕人 畏りました、へえ。(二人の先に立つて窓の方へ行き、さて側へ立
つて二人に自分の前を通らせる)。どうぞこちらへ、へえ。ドミノと鼻
でございませぬ、へえ？

マッコーマス (出口で憤然として) わたしは自分の鼻をつけるよ。
給仕人 (しとやかに) いや、これは成程。が、附鼻はその上へ譯なく
くつゝきます、へえ。餘地は澤山ございます、へえ。餘地は澤山
ございます。(マッコーマスのあとからついて)。

クランプトン (親切な父振つて、窓のところまでファイルに振向いて) 一緒に行
かう、坊や、一緒に行かう。(出て行く)。

フイリツプ (元氣にあとからついて) 行きますよ、阿父さん。行しま
すよ。(窓の敷居の上で立止り、クランプトンを見送り、やがて振り向いて自分
の頭のまはりに後光のやうに棒を壁に曲げ、小さな聲でクランドン夫人と、クロ
ーリヤとにいふ)。あれでも、哀れを感じましたかね。(入つてし
まふ)。

クランドン夫人 (クローリヤと二人ぎりになつて) ヴァレンタインさん
は何故あんなに突然歸つてしまつたのだらうね。

クローリヤ (ぶりくして) 知りません、え、わたしは知りません。
さあ、あつちへ行つて踊りを見ませう。(二人は窓の方へ行く、とヴァ

レンタインに出つくわす。彼は六かしの顔をしていそいで庭から入つて来る。

ヴァレンタイン (しやちこ張つて) や、失禮致しました。皆さんはのこらず退散ななすつたと思つたものですから。

クロリヤ (なぶる様に) 左様思ひながら、あなたは何故歸つていらしつたの。

ヴァレンタイン え、一文無しなもんだから歸つて来ました。二圓五十錢の切符が無いと、あつちへは行けないものですから。

クランドン夫人 なにか忌な事がおありになつたのヴァレンタインさん。

クロリヤ 此人の事なんか氣にしない方がいゝわ、阿母さん。またわたしに新しい侮辱をはじめたの、それつきりの事ですわ。

クランドン夫人 (クロリヤがわざと喧嘩の種を蒔いてるとは思ひもかけないの)

グロリヤ!

ヴァレンタイン 奥様、わたしは何か侮辱らしいことを云ひましたらうか。何か侮辱らしいことをしましたらうか。

クロリヤ あなたはわたしの過去があなたの過去と同じ様だつて、あてつけて居るぢやありませんか。これが一番悪い侮辱ですわ。

ヴァレンタイン わたしはそんなことをちつとも當てつけやしません。が、わたしは明言する、わたしの過去は、あなたの過去に比して、疚しいことはすこしもない。

クランドン夫人 (非常に忿激して) ヴァレンタインさん!

ヴァレンティン ところが、クランドンさんはわたしに云つた通り

そつくりその儘の事を、他の人たちにも云つたといふ事が分つたら——少くとも戀人が前に五人もあつて、その中にはつまらない海軍士官がまじつてゐる事が分つたら、わたしは如何考へていゝんでせう。え、言語同斷だ。

クランドン夫人 併しあなたはその事を——子供たちのほんとうの冗談ですよ——眞面目な事だと考へては居らつしやらないでせうね、ヴァレンティンさん。

ヴァレンティン あなたには眞面目でないうでせう——クランドンさんにも眞面目でないうでせう。併し私にはその男の連中の考へてゐる事が分ります。(馬鹿々々しい程むきになつて) あなたはこ

れまで如斯いふことを御考へになつた事がありますか。失望の生涯、失望から自棄になつてやつた結婚、自殺、それから——うむ——うむ——

グローリヤ (輕蔑らしく述べて) 阿母さん、この人は感情づよい間拔です。(燈籠の方へすうつと行く)。

クランドン夫人 (心地を悪くして) まあ、グローリヤさんや、ヴァレンティンさんは亂暴な奴だと思ひなさるだらうよ。

ヴァレンティン わたしは感情づよい間拔ではありません。わたしはもう永久に感情病が癒つてしまひました。

クランドン夫人 ヴァレンティンさん、わたしどもはお詫びを致します。女といふものは、奴隸時代の表面だけの行儀作法を棄て

て、その自由時代の偽りなき行儀作法を習はなければなりません。グロリーヤを下等だと思つて下すつては困ります（グロリーヤ吃驚して振向く）。これは本當に左様なんぢやありません。

グロリーヤ 阿母さん！あなたはわたしの代りにいひ譯して居らつしやるの。

クランドン夫人 此子はまあ、おまへはね、年が若いものだから、悪いこともあればいゝこともあるんです。ところがヴァレンタインさんは男性について餘程舊式な思想をもつて居らつしやるらしいから、間拔なんていはれて喜ぶわけにはいかないんです。だからもうわたしたちはあつちへ行つて、ドーリーが何をしてるか見て来た方がいゝぢやないか。（窓の方へ行く、ヴァレンタイン立上る）。

イン立上る）。

グロリーヤ あなたは行らしつて下さい。わたしはヴァレンタインさんとさし向ひて御話したいことがあるんです。

クランドン夫人 （吃驚してとめやうとする）まあおまへ！（われながら氣がついて）勸忍して下さい、グロリーヤ。おまへが左様思ふなら、さうするがいゝ。（ヴァレンタインに挨拶して出て行く）。

ヴァレンタイン あ、阿母さんが後家さんであつてくれたら！あなたの六層倍も價值がある。

グロリーヤ わたし初めて聞きました、あなたの氣の利いた事を云ふのを。

ヴァレンタイン 何をくだらない！さあ、云ひたいことを云つて、わ

たしを歸してもらはう。

グロリーヤ あたしこれだけ申上ればいゝんです。あなたはけふ一時わたしをあなたと同等な地位に引ずり落しましたね。あなたは前にあゝいふことが起つてもわたしは自分に警戒を加へる筈はないと思つて居らつしやるのですか——どんな事になり行くか知らないはずだと思つて居らつしやるのですか、自分の淺猿しい弱點に氣がつかない筈だと思つて居らつしやるのですか。

グアレンタイン (烈しくグロリーヤを怒鳴りつけて) そんな事なんかいふもんぢやありません。わたしはあなたの所謂弱點以外何にだつて目をつけるものですか。あなたは自分の進歩した思想

の蔭に隠れ、ば極めて安全だと考へて居たんでせう！ところがわたしはなぐさみに其思想を攪亂してやつたんだ、ちよいと手輕にね。

グロリーヤ (もう自分の思ふ通りにやれるといふことが分りかけて來たので亂暴に) 成程！

グアレンタイン 併しわたしは何故あんな事をしたんだらう。あなたの心の目をさましたといふ氣になつたからだ——あなたの心の底をかき亂したいといふ氣になつたからだ。何故わたしはさういふ氣になつたらう。わたしはふざけてるつもりで居るのに、わたしの本性は馬鹿々々しく眞面目にさせたからだ。あの大事な秋の來た時だれが目を醒したか？ 誰が心の底

をかき亂されたか？だれの心の底が破裂したか、それはわたしの心だ——わたしの心だ。わたしは夢中になつた。が、あなたはたゞ怒つたばかりだ——感情を悪くしたばかりだ。一體あなたはたゞ凡庸普通の若い娘だ、あまり普通すぎてわたしのつゝ込んだゞけの事を、あのくだらない士官の奴にもさせる事は出来なかつたのだ。え、たゞそれだけの事なのです。舊式な云ひ譯なんぞを伺ふ必要はありません。左様なら。(決然として戸口へ行く。)

ケローリヤ お待ちなさい。(ヴァレンティン躊躇する。)ねえ、正直なことをいへば、わたしの方からあなたに如何如斯思つてるんではないんです。あなたそれを知つて居らつしやるの。

ヴァレンティン ふーむ！わたしはあなたの云はうとして居る事を知つてますよ、あなたは自分で普通の女でないと思つてる——わたしの云つた通り——あなたは眞實に心に奥底をもつてと思つて居る。左様思つてあなたはうれしがつて居るのだ。(ケローリヤたぐくとする。)とにかく、わたしも或意味に於てあなたが普通でない事は認める。あなたは利口な娘さんだ。(ケローリヤは憤怒の叫び聲を呑んでヴァレンティンの方へ威嚇するやうに進み寄る。)併しあなたはまだ目が醒めて居ない。あなたはわたしを何とも思つて居なかつた、今でも思つて居ない。が、それはわたし一人の悲劇だ、あなたの悲劇ではない。左様なら。(戸口へ振向く。ケローリヤは掌中の玉に逃げられて茫然としてヴァレンティンを熱視する。)

アレンタインは戸口の握りをまはしたが手を止める。やがて再びグローリヤの方へ向いて、自分の手を出す。快く別れませう。

グローリヤ (大きに安心したが忽ちわざとアレンタインに背中を向けて) 左様ならあなたの傷は屹と遠からず癒りますよ。

アレンタイン (兎に角こつちが先手だといふことが心に浮かんだので顔は晴々して) 癒りませう。こんな傷は治つた後の方がずつといふものです。とにかくわたしはまだ自分のグローリヤといふものをもつて居る。

グローリヤ (急いでアレンタインを屹と見て) あなた何を云つて居らつしやるの。

アレンタイン わたしの空想上のグローリヤ。

グローリヤ (誇顔に) あなただけのグローリヤをもつて居るがいでせう——あなたの空想上のグローリヤだけを。(誇の中からも情緒がゆらめき出した) 實在のグローリヤ——感情を害されて腹を立てさせられて、吃驚させられて——いゝえ、全くです、本當です——自分のあらゆる力がのこらず挫けてしまつた事が分つたので、もう氣が狂ふほど恥かしくつて——それも初めて眞實に出つくわしたばつかりで——あの——あの——(また顔がさつと赤くなつた。そして左の手で顔を掩ひ倒れないやうにアレンタインの右の手で自分の右の手を支へる)。

アレンタイン まあ如何したのです——わたしはまた理性を失ひさうだ。(全身の勇氣を振り起して自分の手を顔から取り去り、男の右の肩

へあて、男を自分の方へ向かせて、まつ直にその目を見る。ヴァレンティンはへどもどして抗議をはじめぬ。グローリヤ、分らないことは云つちやいけない。そんな事はとてもだめだ。わたしは一文なしだ。

グローリヤ 一文ももうける事は出来ないの。他の人はもうけるちや有りませんか。

ヴァレンティン (半ば喜び、半ば不安に) わたしには出来なかつた——だからあなたは不幸を見るばかりだ——あ、あなたは。わたしはたゞの女たらしになつてしまはなければならぬ若し——
 (グローリヤはヴァレンティンの手をしつかり握りしめて、扱男に接吻する。) あ、有難い！(呼吸がはずんで)あ、わたしは——(息を切る)わたしはまるで女といふものが分らない、十二年の経験ではまだ足りな

つた。(嫉妬が激發したので、グローリヤはヴァレンティンを衝放す。と、ヴァレンティンは風前の木の葉の如く、椅子へよろ／＼とかける。此時ドリーと給仕人とワルツを踊つて入つて来る。あとからはクランドン夫人とフィンチとが踊つて出る。ファイルはひとりでぐる／＼廻つて居る)。

ドリー (書物臺の前の椅子にへと／＼となつてかける) あ、呼吸がきれた。おまへは何てワルツがうまいんだらう、ウキリアム！

クランドン夫人 (燈壇の前の床几にへと／＼とかけて) まああなたは何だつてあんな馬鹿なまねをなすつたの、フィンチさん！わたしは二十年前にサウスブレースの夜會で踊つた限りですよ。

グローリヤ (儼然とヴァレンティンに) さあ、お起ちなさい。(ヴァレンティン意氣地なく立上る) もうわたしたちは心にもない遠慮はよしま

せう。阿母さんに仰有い、兩人がお互に結婚の約束をした事を。

(あつげに取られて一同沈黙。ヴァレンティンは狼狽をくつて啞然として居たが、やがて如何にも逃げ出さうといふ心地が見え、容子で一同を見る。)

トリーリー (沈黙を破つて) 第六號ね!

フィリップ しつ!

ドリーリー (仰々しく) あゝ、わたし妙な心地よ! わたし誰かと接吻して見たい。でも自家では禁制だからね。フィンチさんは何處に居るの。

マツコーマス (矢庭に飛上つて) いや、たしかに——(クランプトン窓のところに現はる)。

ドリーリー (クランプトンの方へ駆け出して) あら、あなた好い處へ来たわ。

(接吻する) さあ(父を前へつれ出して) 二人に祝禱をしてやつて下さい。

クローリヤ いゝえ、そんなものは御免を蒙ります、冗談にでも。わたし祝禱が要るやうなら、阿母さんに願ひます。

クランプトン (ひどく失望して、クローリヤに) おまへは此若い人と結婚をしたといふわけなのかね。

クローリヤ (決然と) 左様ですとも。あなたはわたしどもの友人になるお積り、それとも——

ドリーリー (口を入れて)——それとも阿父さんになるつもり??

クランプトン わたしは兩方になりたいね、娘。が、たしかに——! あ、ヴァレンティンさん。わたしはあなたの名譽心に訴へて尙一

度考へてもらひたい。

ヴァレンティン 仰しやる通りです。結婚するなどといふのは狂
氣じみた事です。われ／＼二人が一緒に舞踏に行くにしても、
わたしはこの女から切符代を二圓五十錢といふもの借りなけ
ればなりません。グローリヤさん、そんなに向ふ不見な事をす
るものぢや有りません。自分の身を棄てるやうなものだ。わ
たしはいつそ此事件から綺麗さっぱりになつて再びどなたに
も逢はない方がいゝ。と云つて、わたしは自殺はしやあしませ
ん、わたしは不幸とは思はない、之れは私にとつて一種の安心だ。
わたしは——わたしは怖くなつた——實際怖くなつた。それが
掛直のないとこなんです。

グローリヤ (決然として) あなた行つちやいけません。

ヴァレンティン (へと／＼になつて) 行きはしない、勿論行きはしない。
が——だれかこゝで一寸理窟の解る話をして、みんなを正氣に
してくれるといゝんだがな！わたしにはとても出来ない。ブ
ーンさんは何處へ行つたらう。ブーンさんが其仁なのだがな。
ファイル、ブーンさんと呼んで来てくれ給へ——

ファイルップ 縹緲たる大海原よりか。行つて来やう。(指を空にふつ
て、窓から飛出す)。

給仕人 (調子よくヴァレンティンに) 手前がさし出口を致しても構ひ
ませんければ申上げますが、二圓五十錢位の金なんぞで、お兩人
の御仲を隔てゝはいけません、へえ。手前どもは大よろこびで

三五六
切符をお立替致しますでございませう。御勘定は御都合の時
よろしいので。とにかく御用を仰有つて下さいますれば有難
いのでございます。まことに仕合せな、全くよろこばしい事
へえ。

ファイリツプ (又出て来る) 先生が来ましたよ。(窓越しに指をふる。と、ア
ンはやつて来る。附鼻をとりそれを卓上へ投げつけて、グロリーヤとヴァレン
タインの間を通り過る。)

ヴァレンタイン ブーンさん、要點といふのは――

マツコーマス (煙燻敷の上から口を出す) 失敬ですが、その要點は下流辯
護士の方で御扱ひすべきものでせう。問題といふのはこの若
い連中二人の間の結婚に關する事なんです。お嫁さんは多少

財産をもつて居ます。いや(クランプトンを見て) 多分餘程澤山に
なるでせうな。

クランプトン さうでせう、さうしたいと思ひます。

ヴァレンタイン ところが花婿は賈錢だつてもちやしない。

ブーン (忽ち單刀直入的にヴァレンタインに向ひ) ちやあ極りをつけてし
まふがい。と、いつたらあなたは心地を悪くするだらうが、も
つと遠慮をして云つたところで、矢張心地を悪くするんだ。そ
れに、あなたは我輩に忠告を求めた。だから我輩はそれを與へ
るのだ。兎に角極りをつけてしまふがい。

グロリーヤ (誇顔に) 極りをつげさせずには置きません。

ヴァレンタイン 先生、わたしは自分の爲めに忠告を求めはしませ

ん、グローリヤにしてやつて下さい。

グリーン この人は忠告なんぞは聞かん。あなたが結婚してしまふと、あなたのも聞かん——(突然グローリヤに振返つて)え、あなたは聞きますまい。あなたは聞かと思つてるか、あなたは聞かん。この人は仕事にかつて、生活費をもうけるでせう——(突然グリーンタインの方を向いて)いや、屹度あなたは爲る。あなたはしな

いと思つてるが、あなたはします。細君があなたをさせる様にする。

グリーン (半ば納得して)では、グリーンさん、此結婚はくだらないと思ひますかね。

グリーン 思ひますとも。結婚なんてものはどれでも下らないもの

だ。生れるのも下らない、結婚するのも下らない、生きてるのも下らない。たゞ死ぬのだけが利口なんだ。

給仕人 (グリーンとグリーンタインの間へ割込んで)そこで、失禮ながら手前に一言云はして頂きたいものがございます、へえ。左様なつて見ますと、利口なんてものも感心しないものがございますね？(やさしくグリーンタインに)しよげちやいけません、ねえ、しよげちやいけません。どなたでも愈いよとなると結婚を怖がります。が、結婚も折には極くいゝこゝろもちになります、時々は——極嬉しい、極仕合せなものになる事がございます、へえ。手前も自分の家では大將にはなれませんでしたが、へえ。かゝあの奴はあなたの奥様見たやうでございまして、何でも自分天下

の大將がる氣象でございました。作はその氣象を受けついで居りますので、へえ。併し、手前は尙一度生れ代つて参りまして、も、矢張今の通りに致したいと思ひます。やつぱり今の通りにな。へえ、全くでございますよ。將來のことは分るもんぢやございませぬ、さききの事は分るもんぢやあございませぬ。ファイリッブ、グロリーヤがさうと決心をしたのなら、僕は一言した

いことがある——
ドーリー 話はまとまつて、ヴァレンタインさんはへこたれたのです。そこでわたしたちは舞踏をのこらずだめにしてしまつた。

ヴァレンタイン (一生懸命に色男がつて、グロリーヤに) どうです、一緒に踊

つてくれませんか——

アーン (馬鹿に大きな聲で口を入れる) 失禮ですが、辯護士の御禮としてその特權を要求します。踊つて下さいませるか——有難う。(グロリーヤと踊りながら庭へ出て、提灯の間へ消えてしまふ。ヴァレンタインは取残されて喘ぐ)。

ヴァレンタイン (やうく呼吸を回復して) ドーリー、どうぞわたしに——
(相手になつてもらはうと手を出す)。

ドーリー 御冗談でせう! (逃げ出して、卓子をまはつて、暖爐の側へかけ行く)。
フィンチさん——フィンチさんてば! (マッコーマスを跳びついて、マッコーマスを踊らせる)。

マッコーマス (反抗して) どうぞ、止して下さい——全くどうか——(ド

ーリーの爲めに窓から連れて行かれてしまふ。

ヴァレンタイン (最後の努力を以て) 奥さんどうぞわたしに――

フィリップ (横取りして) 阿母さん入らつしやい。(母を抱いてぐるぐる)

まはつて出て行く。

クランドン夫人 (推止めて) フィル、フィル――(マッコーマスと同じ運命に

なる)。

クランプトン (老人らしい歓聲を出して、一同のあとから) ほゝ！ほゝ！へ！

へ！へ！(此滑稽さに笑ひ出して庭へ出て行く)。

ヴァレンタイン (大椅子にへとくと凭かゝつて給仕人をじつと打尻り) わた

しはまるでもう結婚した事のある人間見た様だ。(給仕人は慥しき

うに氣の毒らしく生擒された男女両性の決闘者を打尻り、静かに首を掉る)。

大正元年十一月十六日印刷
大正元年十一月十九日發行

(二十世紀)

(實價金五十五錢)

著者 松居真玄

東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者 和田靜子

東京市芝區愛宕町二丁目十四番地

印刷者 金崎金平

東京市芝區愛宕町三丁目二番地

印刷所 東洋印刷株式會社



發行所

東京市日本橋區通四丁目五番地
(電話本局五二一番)
(振替口座東京一六一七)

春陽堂

338
111

現代文藝叢書

松居松葉著

(近刊豫告)

第九十編

悲劇喜劇

實價金貳拾五錢
郵税金四錢

内 悲劇 貞 操

容 喜劇 沙 翁

悲劇 秀吉と淀君
喜劇 噂のひろまり

帝國劇場や、文藝協會の私演に上場されたる脚本集。今や新らしき芝居の期待されつゝ、ある時同好諸兄の清覽をまつ。

續刊 青木健作 お絹 小林愛雄 近代詞華集
豫告 相馬御風 峠 真山青果 遊蕩



57

338
111

終